

41823

教科書文庫

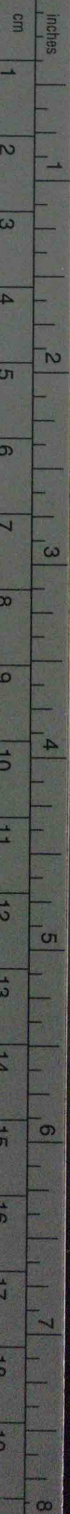
4
810
41-1930
20000 67116

Kodak Gray Scale



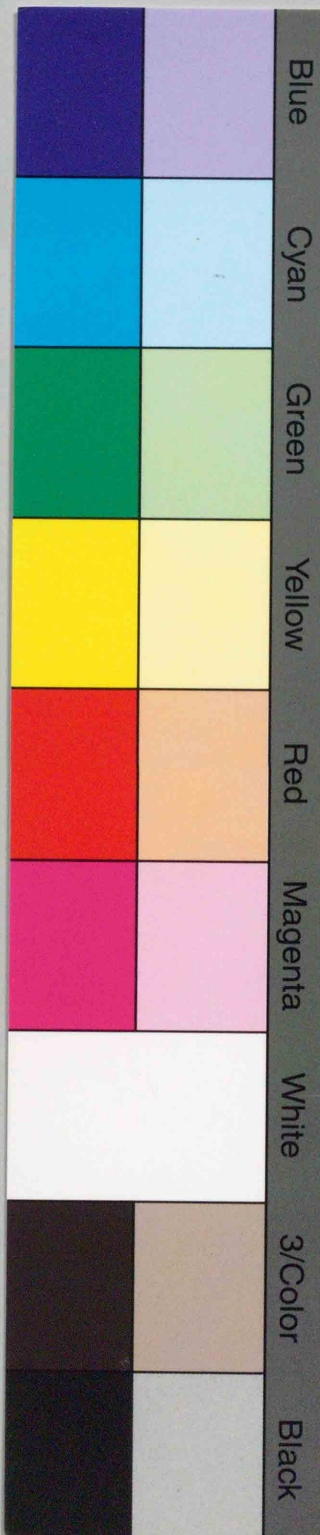
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
BB5

國文選卷八

資料室

日八十二月一十年五和昭

濟定檢省部文

用科語國校學中

國

文

選



東京高等師範學校教授
垣内松三編

42
810
BB5

國文選

- 一 縦に學年を貫き横に學期に互りて特に全篇の組織に留意せり。
- 一 文化と國語との關係を基本として國民精神の涵養を意圖せり。
- 一 教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。
- 一 原作の更改は教科書としての用意に出づ原作者の諒恕を乞ふ。

目次

一 文體の基調……………五十嵐 力……………四

二 月の都……………(竹取物語)……………三

三 伊勢物語……………(伊勢物語)……………三

四 永遠の思慕……………和辻哲郎……………七

五 春は曙……………清少納言……………言

六 菅原道真……………高山樗牛……………七

七 世繼の物語……………(大鏡)……………七

八 法成寺の造營……………(榮華物語)……………五

九 流泉啄木……………(今昔物語)……………六

一〇 長谷寺……………幸田露伴……………五

方丈の記……………鴨 長明……………五

一一 反省の記録……………土居光知……………五

一二 大原御幸……………(平家物語)……………一〇四

一三 待賢門の戦……………(平治物語)……………一六

一四 名残の星月夜……………坪内逍遙……………三七

一五 蘆の若葉……………尾上紫舟……………一七

附録

國文學形態史圖表

國文學年表 上

一 文體の基調

口から耳へ語り傳へられた我が上古の原始的文章は、先づ漢字を借り漢文を用ひて堅い調子に書かれ、次に假名の發明があつて、始めて柔かい自らなる調子の文となり、更に進んで漢字と假名とを併用して、硬軟二つの調子を融合した文が創造されるやうになつた。その基調としての文體は幾多の曲折を経、種々の要素を加味し、以て思想表現に適應する様式を洗練して、今日に至つたのである。

我が國の最古の文章は祝詞である。祝詞は太古淳樸な吾等の祖先が、神助を得、罪穢から清まらんが爲に、全力を盡くし、衆智を合はせて、作り成し磨き成したもので、その重ね詞の初心にして重々しき、譬喩の斬新にして妥當なる、擬人法

祝詞 卷七「國語の愛護」參照。

の奇抜にして自然なる、漸層の段取の面白さ、如何にも愉快な文章である。次に祝詞に似たものに宣命がある。宣命の文は極めて莊嚴で、同時に華麗である。祝詞は神に告げる詞であるから、自然に敬虔尊仰の情感が主となつて居るが、宣命は天皇から群臣に告げ給ふ詞であるから、自然に慈悲愛撫、依頼の情感が著しく現れてゐる。

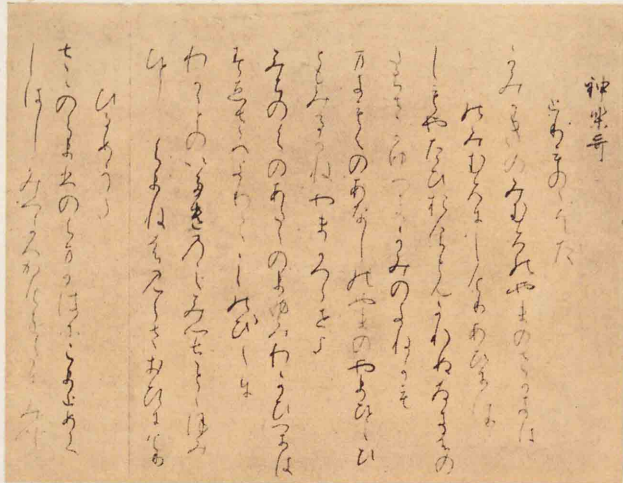
古事記は古傳をそのままに筆記して、吾等の祖先の粧はざる面目を現したもので、その中には、我が民族固有の考へ方、感じ方、語り方、書き方の微妙な陰影曲折を現して居る。その文は優美・莊嚴・滑稽・重厚・輕妙等の多様な趣を含んで、よく洗練されてありながら、しかも全體としては如何にも素樸で、匠氣さもないふべき厭味が全くない。これが古事記の特色であつて、實に我が國の文章の祖をなすものである。

宣命 卷七、一七頁參照。

古事記 卷七「日本武尊」參照。

平安朝時代の初期は、漢文學が隆盛を極めた爲に、歌にも文にも未だ花々しい發達は見られなかつたが、その末期に近づいて、伊勢・竹取の二物語が現れた。この二物語は我が物語・小説の元祖ともいはれるもので、文章發達の上から見れば、二つとも假名の出來てから數十年を経て、この利器が文學上の作品に應用されかゝつた頃のものであり、又漢文盛行の後を承けて、純粹な平假名ぶりの國文が芽を出し初めた頃のものである。句讀短かに、一本調子に、切つては續け、切つては續けて行く工合や、優美ながら何處かに堅い調子の潜んである工合は、如何にも古事記と和歌との外に國文の手本を持たなかつた國民が、四角な漢字のみを使用してゐた際に、自由な假名の出來たのに驚喜して、覺束ない手振で怖るゝ試みたといふやうな趣が見られる。吾等は伊勢・竹

伊勢物語 二〇頁參照。
竹取物語 一二頁參照。



高野切 (傳紀貫之筆)

取の文に於て、吾等の祖先が始めて漢字を離れて假名に就き、漢文を離れて假名文を試みた際の、興味深い姿を見るこゝが出来。又、竹取・伊勢・落窪・宇津保・源氏と讀みつゞけるこゝによつて、漢字・漢文のぎこちない要素が如何様にして取り去られて、優美な純粹な假名文が出来たか、句讀短かで、ねばりのない文章が、如何にして綿々々々續く、のんびりした柔かな文章になつたかを知るこゝが出来。

次いで現れた作品に、土佐日記と古今集の序とがある。いづれも當時の歌壇の棟梁たる紀貫之の作で、前者は日記の魁をなし、後者は評論文の魁をなした。その古今集の序が句作りののんびり丸く、句讀長になつた點から推すと、これが竹取・伊勢の二物語と源氏物語との間の橋掛りをなしたものと見られ、又支那の四六文の妙味を假名文の上に移植

落窪物語 四卷。作者不詳。繼子いちめの話の骨子とせり。参考書には、賀茂眞淵「落窪物語頭書」村田春海・橋千陸「落窪物語註解」甫喜山景雄「落窪物語證解」中村秋香「落窪物語大成」吉川秀雄「校註落窪物語」宇津保物語 二十卷。作者不詳。倭蔭・忠乞・藤原の君・嵯峨院・梅の花笠・吹上祭の使・菊の宴・貴宮・初秋・田鶴群鳥・藏開・國讓樓などの篇より成る。異本多くして篇名も異なり、篇の順序錯亂し、脱漏をも生ぜり。参考書には、

五、源氏物語
 枕草子、後集、
 能頂、
 下鏡
 榮華物語
 今昔物語

したものとも見られる。次の時期に於ける假名文の雙璧は紫式部の源氏物語と清少納言の枕草子とである。源氏五十四帖は、嘗にこの時代の代表作たるのみならず、日本文學全體をも代表すべき傑作であり、同時に世界の廣い舞臺に押出しても誇るに足るべき名篇である。全篇を通じて洗鍊推敲を極め、優美艷麗を盡くした名文であつて、實に假名文を大成したものと云ふべきである。枕草子は、第一に鋭利な觀察、第二に簡勁な筆致をその特色とする。よく簡寫精叙兩面の技巧を具へて、或は寸鐵人を刺し、或は歩々錦を踏むの思あらしめる。枕草子以後今日に至るまで、隨筆漫筆と稱せらるゝものは無數に現れたが、未だその右に出づるものは一つもない。

源氏物語・枕草子の出たのは關白道長の頃で、この時藤原

細井貞雄 『宇津保物語 玉琴』
 土佐日記 四三頁參照。
 古今集の序 卷七、一四八頁參照。
 四六文 漢文の一體にて、六朝時代に盛行せり。主として四字・六字の句を用ひて、對句を排列し、聲律を重んじたる綺麗なる文。
 枕草子 三三頁參照。

氏の榮華と假名文の發達とは、相並んでその頂點に達した。然るに藤原氏の勢力が衰ふるにつれて、假名文も漸く頽れ、たゞ力の無い筆で、覺束ない史實などを記述するに満足し、又新に生まれた文章も、如何にも粗笨蕪雜で、未だ藝術品と見られるまでには至らなかつた。前者の代表作は榮華物語、大鏡等であり、後者の最も善き代表作は今昔物語である。凡そ事物の發達には、概ね三段の順序がある。茲に物があれば必ずこれに反對する者が現れる。そして反對者が現れると、次には必ず二者を調和するものが現れて來る。平安朝時代は、我が國の文章史上、承前起後の重要な時期であるが、その時期に於ける文體の推移も、正しくさうであつた。その初期に盛んであつたものは漢文學で、先づ史實を斷片的に書いた六國史の類が現れ、次に假名で思ひ切つた想像を

榮華物語 五五頁參照。
 大鏡 四七頁參照。
 今昔物語 六〇頁參照。

六國史 日本書紀・續日本紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄の六つの勅撰國史をいふ。いづれも漢文體の編年史なり。

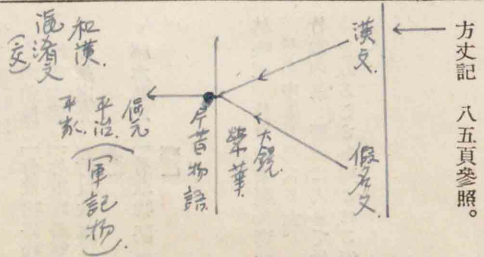
書いた組織ある物語類が現れ、更に假名で史的事實を書いた組織ある榮華物語・大鏡等が現れたが、これに次いで現れたのは、丸い柔かな假名と四角な堅い漢字とを合體させて、傳説・珍話を斷片的に書並べた今昔物語であつた。この文體は次の時期に入ると共に、更に磨きをかけられて、保元・平治平家等の軍記物語を生むに至つた。

内容は自然に形式を喚び起すものである。新しい事實が起れば、これを寫すべき新しい文章の現れるのは自然の數である。源平の軋轢から、やがて政治は武門の手に歸して、世は一變した。長袖を翻して花月に吟詠した大宮人は凋落して、これに代つたものは、實に馬上勇ましく戰塵を蹴散らす武人であつた。今昔物語以來、不束ながら養はれて來た、堅い齒切れのよい男性的文章が、茲に著しい發達をなしたのも

保元物語 三卷。保元の亂の顛末を記せり。
平治物語 一一六頁參照。
平家物語 一〇四頁參照。

當然の道程であらう。軍記物語が武人の生活を生き／＼と描いたのに對して、同じ時代に當時の世相の外に在つて、孤寂の心境をまぎ／＼と寫したのが方丈記である。彼が新生活・新言語・新様式を基として、舊生活・舊言語・舊様式を取入れたのに對し、これは舊生活・舊言語・舊様式を基として、新生活・新言語・新様式を加味して一新文體を拓いた。この兩者の長短が加除され洗鍊された文體こそ、後世長く我が國の文章の主體となり、廣く世に行はれて今日に至つたものである。

要するに我が國の文體は、和漢の硬軟を調和し、これを基調として内生外來のあらゆる影響を取入れつゝ、各種の様式を漸次に進歩せしめて今日に至つたのである。此の文體の基調が無限の吸收力、博大な同化力を持つことは、我が國文の將來の爲に眞に心強い所である。(五十嵐力の文による)



二月の都

春の初より赫映姫月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。或人の月の顔見るは忌むことこそ制しけれども、ごもすれば人まには月を見てはいみじく泣き給ふ。ふづきの望の月に出で居て、切に物思へるけしきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げて曰く、赫映姫例も月をあはれがり給ひけれども、此の頃となりては、たゞごごにも侍らざめり。いみじく思し歎くことあるべし。よくよく見奉らせ給へ。と言ふを聞きて、赫映姫にいふやう、なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ、うましき世に。と言ふ。赫映姫、月を見れば世の中心細くあはれに侍りなでふ物をか歎き侍るべき。といふ。赫映姫のある處に到り

参考資料

竹取物語 一卷。かぐや姫物語。又は竹取の翁物語ともいふ。作者不詳。参考書には、

- 小山伯風 「竹取物語抄」
- 田中大秀 「竹取物語解」
- 今泉定介 「竹取物語講義」
- 福永弘志 「竹取物語新釋」

赫映姫 竹取の翁媼夫妻が竹の中より得たる女。竹取の翁 野山に入りて竹を取ることを業とせる老人。

あが佛 我が子の佛の如き清らなるもの意。

て見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ。といへば、思ふことなし、物なむ心細く覺ゆる。といへば、翁、月な見給ひそ。これを見給へば、物思すけしきはあるぞ。といへば、いかでか月を見ではあらむ。さて、なほ月出づれば出で居つゝ、歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月のほごになりぬれば、なほ時々は打歎き泣きなごす。これをつかふものごも、なほ物思すことあるべしと囁けど、親を始めて、何事ごも知らず。
はづき望ばかりの月に出で居て、赫映姫いこいたく泣き給ふ。人めも今はつゝ、み給はず泣き給ふ。これを見て、親ごも何事ごも問ひさわぐ。赫映姫泣くく、いふ、さきくも申さむと思ひしかごも、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過ぐし侍りつるなり。さのみやはさて打出で侍りぬる

ぞ己が身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それを昔の契ありけるによりてなむこの世界にはまうで來りける。今は歸るべきになりければ、この月の望にかのもこの國より迎に人々まうで來むず。さらばまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。こいひていみじく泣く翁、こはなでふことを宣ふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、菜種の大きさはせしを、我がたけ立並ぶまで養ひ奉りたる我が子を、何人か迎へ聞えむ。まさしに許さむや。こいひて、我こそ死なぬ。こて泣きの、しるここ、いと堪へ難げなり。赫映姫の曰く、月の都の人にて父母あり。片時の間にて、かの國よりまうで來しかども、かくこの國には、數多の年を経ぬるになむありける。かの國の父母の事も覺えず、ここにはかく久しく遊び聞えてならひまつれば、

いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど己が心ならず、罷りなむとする。こいひて諸共にいみじう泣く。使はるゝ人ども、年頃ならひて、立別れなむ事を、心ばへなごあでやかに、美しかりつることを見ならひて、戀しからむこと。の堪へ難く、湯水も飲まず、同じ心に悲しがりけり。この事を帝聞しめして、竹取が家に御使遣させ給ふ。御使に竹取いで會ひて泣くこと限なし。この事を歎くに、髪も白く、腰もかままり、目も爛れにけり。翁今年は五十ばかりなり。けれども、物思には片時になむ老になりける。こ見ゆ。御使仰せ言きて翁に曰く、いと心苦しく物思ふなるは、まことにか。こ仰せ給ふ。竹取泣くく、申す、この望になむ月の都より赫映姫の迎にまうで來なる。たふこく問はせ給ふ。この望には、人々賜はりて月の都の人まうで來ば、捕へさせむ。こ申す。

御使歸り参りて、翁の有様申して、奏しつるごごも申すを
 聞しめして宣ふ。一目見給ひし御心にだに忘れ給はぬに、且
 暮見馴れたる赫映姫を遣りては、いかゞ思ふべきこと、かの
 望の目司々に仰せて、勅使には少將高野大國といふ人を差
 して、六衛のつかさ合はせて、二千人の人を竹取が家に遣す。
 家に罷りて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いこ
 多かりけるに合はせて、あける隙もなく守らす。姫塗籠の内
 に赫映姫を抱かへて居り、翁も塗籠の戸をさして戸口に居
 り、翁の曰く、かばかり守る處に、天の人にも負けむや。こいひ
 て、屋の上に居る人々に曰く、つゆももの空に翔らば、ふご射
 殺し給へ。守る人々の曰く、かばかりして守る處に蝙蝠一つ
 だにあらば、まづ射殺して、外にさらさむと思ひ侍り。こいふ
 翁これを聞きて、頼もしがり居り。

六衛 左右の近衛・衛門・兵衛の六府の總稱。

塗籠 土藏造りの藏。

これを聞きて、赫映姫は、鎖しこめて守り戦ふべき下ぐみ
 をしたりごも、あの國の人を、え戦はぬなり。弓箭して射られ
 じ。かく鎖しこめてありごも、かの國の人來ば皆開きなむご
 す。相戦はむごすごも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よ
 もあらじ。翁のいふやう、御迎に來む人をば、長き爪して、眼を
 掴み潰さむ。さが髪を取りてかなぐり落さむ。さが尻を搔出
 でて、こゝらのおほやけ人に見せて、恥見せむ。ご腹立ち居り。
 赫映姫曰く、聲高にな宣ひそ。屋の上に居る人ごもの聞く
 に、いごまさなしいますかりつる志ごもを、思ひも知らで罷
 りなむずることの口惜しう侍りけり。長き契のなかりけれ
 ば、程なく罷りぬべきなめりと思ふが悲しく侍るなり。親達
 のかへりみをいさゝかだに仕うまつらで、罷らむ道も安く
 もあるまじきに、月頃も出で居て、今年ばかりの暇を申しつ

まさなし 正無しの意に
 て、良からぬこと。

れど、更に許されぬによりてなむ、かく思ひ歎き侍る。御心の
み惑はして去りなむことの、悲しく堪へ難く侍るなり。かの
都の人は、いと清らにて老いもせずなむ、思ふこともなく侍
るなり。さる處へまからむずるも、いみじくも侍らず、老い衰
へ給へるさまを見奉らざらむこそ戀しからめ。こいひて泣
く。翁、胸痛きことなし給ひそ。うるはしき姿したる使にもさ
はらじ。こねたみ居り。

かゝる程に宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家の邊り晝の
明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばか
りにて、在る人の毛の穴さへ見ゆるほごなり。大空より人雲
に乗りて降り來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ち
連ねたり。これを見て、内外なる人の心ごも、物に襲はるゝや
うにて、相戦はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓箭

を取立てむとすれども、手に力もなくなりて、痿えかゞまり
たる中に、心さかしきもの、念じて射むとすれども、外さまへ
往きければ、何れも戦はで、心地たゞ痴れに痴れて守りあへ
り。〔竹取物語〕

竹取物語にとつて、その神仙譚的な要素が本質的なもので
ある。そのユーモアの調子も亦、必然なものである。いかに此の
作が平安朝貴族の情生活を誇張してあるにもせよ、その描く
所は現實界ではなくして、たゞ想像の中にもみ存する世界で
ある。その世界を現實界から借りた寫實的な形象で描いたま
であるから、この物語は寫實的といふことを特長とする世
態小説ではない。たゞお伽噺としてのみ正當に評價せられる
ものである。しかしお伽噺としての竹取物語の様式は、その後
に於てよき後繼者を持たなかつた。寧ろそれは天平時代以來
展開して來たお伽噺文學の流の絶頂であつて、突如としてこ
の時代に出現したものでなからう。(和辻哲郎の文による)

三 伊勢物語

一 都 鳥

昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京には居らじ、東の方に住むべき處求めむとて往きけり。もごより友とすする人一人二人して往きけり。道知れる人もなくて惑ひ往きけり。三河の國八橋といふ所に到りぬ。そこを八橋といひけるは、水行く河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるに
（八橋）よりてなむ、八橋とはいへる。その澤の邊りの木蔭におり居て、餉喰ひけり。その澤に杜若いとおもしろく咲きたり。それを見て、或人の曰く、「かきつばたといふ五文字を、句の上に据ゑて旅の心を詠め。」といひければ、よめる。
 〔（八橋）〕から衣きつ、なれにしつましあればはるくきぬ

【参考資料】

伊勢物語 二卷。在五中將物語とも稱す。作者不詳。百二十六條の小話集にして、各條概ね「昔男ありけり」と筆を起し、次に來る和歌の序詞書をなせり。参考書には、北村季吟「伊勢物語拾穂抄」

荷田春滿「伊勢物語新釋」

賀茂真淵「伊勢物語古意」

藤井高尙「伊勢物語新釋」

鎌田正憲「考證伊勢物語詳解」

八橋 愛知縣碧海郡。今知立町の東に遺蹟あり。杜若



る旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人餉の上に涙落して、ほこびにけり。往きく、駿河の國に到りぬ。宇津の山に到りて、我が入

じりくも住吉へ行幸し

我入てもむろくありぬ住吉の
 きよのひめねく、よへん
 へ行ん神けきやうし給て
 ひたまりも君は白浪みづ
 がきのひさしき世よりい
 はひそめてき

伊勢物語 古(本) 語 物 勢 伊
 らむとすする道はい
 と暗う細きに、蔦、楓
 は茂りて、物心細く、
 すゞるなる目を見
 ることと思ふに、修
 行者逢ひたり。見れ
 ば見し人なりけり。

宇津の山 靜岡縣安倍郡さ志太郡との界。

むかしまかご住吉に行幸したまひけり
 我見てもひさしくなりぬ
 住吉のきよのひめ松い
 よへぬらん
 おほん神けきやうし給て
 むつまじと君は白浪みづ
 がきのひさしき世よりい
 はひそめてき

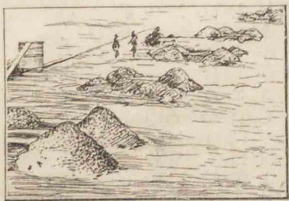
out

富士の山をみれば、五月のつごもりに雪いと白う降り。時しらぬ山はふじの嶺いつとてか鹿の子まだらに雪のふるらむ

その山は、こゝに譬へば、比叡の山をはたちばかり重ねあげたらむほごして、なりは鹽尻のやうになむありける。

なほ往きく、て武藏の國と下總の國との中に、いご大きな川あり。それを角田川といふ。その川の邊りに群れゐて思ひやれば、限なく遠くも來にけるかな。こわびあへるに、渡守はや舟に乗れ。日も暮れなむ。こいふに、乗りて渡らむとするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と足とあかき、鳴の大ききなる、水の上に遊びつゝ、魚を喰ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人え知らず。渡守に問ひければ、これなむ都鳥。こいふを聞きて、

鹽尻



名にしおはばいざこ問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやこ

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

二 小野の御室

昔、惟喬親王とまをす皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛には、その宮になむおはしましける。その時右馬頭なりける人を常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりければ、その人の名忘れにけり。狩は懇ろにもせで、酒を飲みつゝ、大和歌のみかゝれりけり。今狩する交野の渚の院の櫻ここにおもしろし。その木の下におり居て、枝を折りて挿頭にさして、上中下、みな歌よみけり。右馬頭なりける人のよめる。

世の中にたえて櫻のなかりせば春のこゝろはのど

惟喬親王 文徳天皇の皇子。小野宮と稱す。詩歌をよくす。貞觀十四年出家し、寛平九(一五五七)年薨す。年五十四。

水無瀬 今の大阪府三島郡廣瀬村。
右馬頭 在原業平。

交野の渚の院 大阪府北河内郡牧野町。

けからまし

こなむ詠みたりける。また或人の歌

散ればこそいご櫻はめでたけれうき世になにか

ひさしかるべき

さて、その木の下を立ちて歸るに、日暮になりぬ。

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで酒飲み物語して、

さてあるじの皇子酔ひて入り給ひなむとす。十一日の月も

隠れなむとすれば、かの右馬頭よめる。

あかなくにまだきも月のかくる、か山の端にげて

入れずもあらなむ

かくしつゝ、まうで仕うまつりけるを、皇子おもひの外に

御髪おろさせ給ひて、小野といふ處に住み給ひけり。正月に

拜み奉らむとてまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと

小野 京都府愛宕郡修學院村。

高し。しひて御室にまうでて拜み奉るに、つれづれいご物

悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、古のこごな

ご思ひ出でて聞えけり。さても侍ひてしがなご思へご、おほ

やけ事ごもありければ、え侍はで、夕暮に歸るごて、

忘れては夢かごぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君

を見むごは

三 さらぬ別

昔男ありけり。身はいやしけれご、母なむ宮なりける。その

母、長岡といふ處に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、ま

うづごしけれご、しばくえまうでず。一人子にさへありけ

れば、いごかなしうし給ひけり。

さる程に、師走ばかりに、ごみの事ごて御文あり、驚きて見

れば、ご言はなくて、

長岡 京都府乙訓郡向日町。

老いぬればさらぬわかれのありといへばいよく
 見まくほしき君かな
 となむありける。これを見て馬にも乗りあへず参るこて、い
 といたう打泣きて、道すがら思ひける。

世の中にさらぬわかれのなくもがな千代もといのる
 人の子のため (伊勢物語)

和歌なり俳句なりの英譯を讀んで見ると、奈何に我等の複
 雜な心があの短い詩形に織りこまれて居るかが分る。和歌や
 俳句の英譯ほど原詩に遠い感じのするものはない。これは譯
 者の罪に歸すべきものだらうか。それほどわれ等の用ふる言
 葉は單純でないことを證據立てるのではあるまいか。

すぐれた人の書いた好い文章は、それを默讀翫味するばか
 りでなく、時には心ゆくばかり聲をあげて讀んで見たい。我々
 はあまりに默讀に慣れすぎた。文章を音讀することは、愛なく
 ては協はぬことだ。(島崎藤村「藤村隨筆集」)

島崎藤村 小説家。名は春
 樹。明治五年長野縣に生ま
 る。明治學院の出身。

四 永遠の思慕

「物のあはれ」を文學の本旨として力説したのは本居宣長
 である。宣長は平安朝の文學、特に源氏物語によつてこの思
 想に到達したのである。文學は教誡を説くことを目的とす
 るものではない。また深遠なる哲理を論ずるものでもない。
 功利的の手段としては何の役にも立たぬ。たゞ「物のあはれ」
 を寫せばその能事は終るのであつて、そこに文學の獨立が
 あり價値が認められるのである。

宣長の説く所は、何事にまれ感すべきことに當りて、感ず
 べき心を知りて感ずるのが、物のあはれを知ることで、その
 感ずることは、よきことにまれ悪しきことにまれ、心の動きて
 「あゝ、はれ」と思はるゝことであるといふのである。即ち我等

參考資料

源氏物語 五十四卷。紫
 式部の作。篇名は桐壺・
 帚木・空蟬・夕顔・若紫・
 末摘花・紅葉賀・花宴・
 葵・賢木・花散里・須磨・
 明石・澁標・蓬生・關屋・
 繪合・松風・薄雲・權乙
 女・玉臺・初音・胡蝶・
 螢・常夏・篝火・野分・御
 幸・藤袴・真木柱・梅枝・
 藤裏葉・若菜・柏木・横
 笛・鈴蟲・夕霧・御法・
 幻・雲隱・匂宮・紅梅・
 竹河・橋姬・椎本・總角・
 早蕨・宿木・東屋・浮舟・
 蜻蛉・手習・夢浮橋。參
 考書には、
 四辻善成「河海抄」
 一條兼良「花鳥餘情」
 西三條公條「源氏物語細
 流抄」
 北村季吟「源氏物語湖
 月抄」
 僧 契沖「源註拾遺」

のいふ所の感情を對象に即していひ現すものである。

宣長が物語の典型と認める源氏物語は、殊に人の感ずべきことの限りを様々に書き現して、あはれを見せたもので、これを讀む人は、それに描かれた物のあはれを思ひ遣り、物のあはれを知り、憂きをも思ひ慰めるのである。物のあはれは、心のまことであるといふ思想がその根據をなしてゐる。人性の根本は理智でも意でもなく、感情である。従つて、その表現された物のあはれに没入することは、囚れたる皮面を離れて人性の奥底に歸ることを意味するのである。特に中古の物語は俗人の情に優りてこよなくあはれ深きみやびやかなる情緒の限りを寫してゐるから、これを讀む人の心には、その日常の情よりも遙かに高い、淨められた物のあはれが窺はれて、その情は淨められ、高められるのである。かく

賀茂真淵 「源氏物語新釋」
本居宣長 「源氏物語玉の小櫛」
萩原廣道 「源氏物語評釋」
佐々醒雪外三氏 「新釋源氏物語」
池邊義象 鎌田正憲 「校訂源氏物語詳解」
金子元臣 「定本源氏物語新解」
永井一孝 「集註源氏物語新考」
藤田徳太郎 「源氏物語要綱」
本居宣長云々、その著「源氏物語玉の小櫛」に、「この物語のおほむね、昔より説きもあれども、みな物語といふもの心ばえをたづねずして、たゞ世のつれの儒佛などの書の趣をもて論ぜられたるは作り主の本意にあらざる。たま／＼かの儒佛などの書と自らは似たる心、合

て宣長が説く所のみやび心、即ちまごころの藝術的表現は、我等の仰望する所の理想と異ならぬのである。

想ふに「物のあはれ」とは限りなく純化され、淨化されようとする傾向を持った感情であり、我等をその根源に歸らしめようとする働きであつて、畢竟永遠への思慕である。歡びも悲みも皆この思慕を含むのである。意識するご否ごに拘らず詠嘆を根據づけるものはこの思慕である。あらゆる歡樂は永遠を思ひ、あらゆる愛は永遠を慕ふ。かるが故に愛は悲みであり、愛の理想を大慈大悲と呼ぶことの深い意味はこゝにあるのである。かくて現實の人生に於て完全に充されることのない我等の感情は、永遠を思慕して止まないものである。人生に於ける一切の愛、一切の歡び、一切の努力はすべてこゝに根據を有するのであつて、物のあはれは人生を

へる趣もあれども、それを捕へてすべてをいふべきにはあらず。大かたの趣はかの類はいたく異なるものにて、すべて物語は又別に物語の一つの趣のあることなり。かくて古物語は、こゝらあるが中にも、この源氏物語は一きは深く心をいれて作れるものなり。さてすべて物語どもの趣、またそれを讀みたる人の心ばえなどは、この源氏物語の卷々の所々に見えたるをもてささるべし。今それをこれかれ引きいでて、そのことの意味も聊かいひてさささん。蓬生の卷にいはく、
はかなきふる歌物語などやうの御すさみごころにてこそつれ／＼をまきらはし、かゝるすまひをも思ひなごさむるわざなんめれ。
物語をよみて、さる人の心を慰むる故は、わが身

美化するため、缺くべからざるものである。文學はこの「物のあはれ」を具體的な姿に表現するものであつて、最もこれを適切に表現したものは平安朝の文學である。

平安朝は意力の不足の著しい時代である。それは數世紀に亙る平和な貴族生活の眼界の狭小、精神的弛緩、享樂の過度、よき刺戟の缺乏などに原因するのである。當時の人々は地上生活のはかなさを知つては居たが、哲學的に深く思索して行かうとするのではなかつた。又彼等は地上生活の愉悅を知つては居たが、飽くまでも樂欲の杯を飲干さうとする大膽さはなかつた。彼等は進むに力なく、たゞこの兩端に引かれて低徊するのみであつた。しかもその感受性に於ては鋭敏で、思慕の情の強い詠嘆の心を抱いて居た。これこそ「物のあはれ」といふ言葉に最もふさはしい心である。我等は

三〇
と似たる様のことを書きたるを讀めば、世にはわが如くうき身のたぐひも有りけりさやうに思ひて心の慰むなり。繪合の巻には、

かの旅の御日記云々、知らで今見む人だに、すこしもの思ひ知らむ人は、涙惜しむまじくあはれなり。まいて云云。

旅の御日記は、源氏の君の須磨の御旅居の程の日記なり。その折のことは知らで、今始めてこの日記ばかりを見む人だになり。ましてその時のことを知りて讀む人の心はこなり。胡蝶の巻には、むかし物語を見給ふにも、やう／＼人の有様、世の中のあるやうを見知り給へば云々。

すべて物語は世にあること、人の有様心を、さまざま書けるものなる故に、讀めば自ら世の中の有様

この言葉に、實行力の缺乏、停滯せるものの詠嘆といふが如き陪音の伴なふこころを感じると同時に、平安朝の文學に現れた永遠への思慕は、物のあはれといふ言葉を以て代表されるべきものであると認める。しかし永遠への思慕は、その時代の精神生活全體によつて規定され、その時代の特殊の形に現れたものであつて、必ずしも物のあはれといふ言葉にふさはしい形式にのみ現れたものではないと思ふ。萬葉集に於ける朗かにして快活な叫び、軍記物語に見る苦闘の叫び、或は寂の心などは、いづれも永遠への思慕の現れであつて、平安朝の「物のあはれ」と相通するものである。しかし力強い苦闘の跡を見せぬ、鋭さの缺けた内氣な率直さのない、優柔なものとして特性づけられてゐる所の「物のあはれ」は、平安朝の精神に限られる。この「物のあはれ」を代表する所の傑

をよ／＼心得、人のしわざ情のあるやうをよくわきまへ知る。これぞ物語をよまむ人のむねと思ふべきことなりける。云々。」

作は皆婦人の作である。従つて我等は「物のあはれ」と婦人の心との密接な關係に想到せざるを得ない。

「物のあはれ」は婦人の心に咲いた花である。女らしい一切の感受性、女らしい一切の氣弱さがそこに横溢してゐるのは當然である。我等が平安朝文學に對して不滿を感じるのは、この男性的なるものの缺乏にある。しかしその「物のあはれ」の人生に及ぼす影響に至つては、實に偉大なものである。ここを認める。文學を道徳と政治との手段としての他には、價值づけなかつた儒教全盛の徳川時代に於て、宣長がこの「物のあはれ」を見出して、文學に獨立の價值を與へたことは、日本思想史上の劃期的な出來事であつて、その功績は大いに特筆すべきものである。（和辻哲郎の文による）

和辻哲郎 卷七、四〇頁參照。

五 春は曙

春は曙やうく、白くなりゆく山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜、月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。秋は夕ぐれ、夕日華やかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねごころへゆくこゝて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いそをかし。日入りはてて、風の音、蟲の音などいとあはれなり。冬はつこめて、雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜などいそ白く、又さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るも、いとつきつくし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃・火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。

【參考資料】

枕草子 異本多くして卷數一定せず。清少納言の隨筆。參考書には、加藤馨齋「枕草紙抄」北村季吟「枕草子春曙抄」鈴木弘恭「訂正増補枕草子春曙抄」松平 靜「枕草紙詳解」武藤元信「枕草子通釋」金子元臣「枕草子評釋」永井一孝「校定枕草紙新釋」

淵はかしこ淵。いかなる底の心を見えて、さる名を付きけむと、いごをかし。ないりその淵。誰にいかなる人の教へしならむ。青色の淵こそ、又をかしけれ。藏人などの具にしつべくて。稻淵。かくれの淵。のぞきの淵。玉淵。

野分の又の日こそ、いみじう哀に覺ゆれ。立部透垣などの伏しなみたるに、前裁ごも心ぐるしげなり。大きな木ごも倒れ、枝なども吹折られたるだに惜しきに、萩・女郎花などの上によろぼひ這ひ伏せる、いご思はずなり。格子の壺などに、ささきはを殊更にしたらむやうに、こまぐさ吹入れたるこそ、荒かりつる風のしわざごも覺えぬ。いご濃き衣のうはぐもりたるに、朽葉の織物、うすものなどの小桂著て、まごこ

小桂 中古、相當身分ある婦人の通常禮服。



しく清げなる人の夜は風のさわぎにねざめつれば、久しう寢おきたるまゝに、鏡うち見て、母屋より少しるざり出でたる、髪は風に吹きまよはされて、少しうちふくだみたるが、肩にかゝりたるほご、まごこにめでたし。物あはれなる氣色見るほごに、十七八ばかりにやあらむ、小さうはあらねご、わざご大人などは見えぬが、生絹の單衣のいみじう綻びたる、花もかへり濡れなごしたる、薄色の宿直物を著て、髪は尾花のやうなるそぎすゑも、たけばかりなれば、衣の裾にはづれて、袴のみ鮮かにて、そばより見ゆる、童べ若き人々の、根ごめに吹折られたる前裁なごを、取りあつめ起し立てなごするを、羨ましげに推量りて、簾に添ひたるうしろもをかし。

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃

に火おこして物語などして集り侍ふに、宮、少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ。と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く捲上げたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ寄らざりつれ。人々、なほこの宮の人にはさるべきなめり。といふ。(清少納言「枕草子」)

男もすなる日記といふ物を、女もしてみむとてするなり。その年の十二月の二十日餘りひと日の日の戌の時に門出す。そのよし聊か物に書きつく。

或人縣の四とせ五とせ果てて、例の事ども皆しをへて、解由など取りて、住む館より出でて舟に乗るべき處へ渡る。かれ、これ、知る、知らぬ、送りす。年頃よく、具しつる人々なむ別れ難く思ひて、頻りにとかくしつゝのゝしるの中に、夜更けぬ。
二十二日 和泉の國まで平かにと、ねがひ立つ。藤原の言實、船路なれど、馬のはなむけす。かみなかしも、酔ひあきて、いとあやしく、潮海しほうみのほとりにて、あざれあへり。(紀貫之「土佐日記」)

宮 一條天皇の皇后藤原定子。當時中宮。
香爐峯の雪 白氏文集に、「遺愛寺鐘歌」枕詞、香爐峯雪撥簾看

清少納言 清原元輔の女。一條天皇の皇后定子に仕ふ。

【参考資料】

土佐日記 一卷。紀貫之の作。土佐の國より京都に歸るまでの日記。参考書には、
岸本由豆流「土佐日記考證」
鈴木弘恭「訂正増補土佐日記考證」
富士谷御杖「土佐日記燈」
鹿持雅澄「土佐日記地理辨」
松本弘隆「土佐日記地理辨追考」
今泉定介「土佐日記講義」

六 菅原道眞

延喜元年二月一日、道眞公京都を發して太宰府に赴く。從ふ者は小男と小女と、一門生とのみ。その子の官にあるもの處を異にして盡く流竄せられ、その他、門下郎等一人も公に伴なへるものなし。夫人、女子亦隨ひ行くを許されず。たゞ敕使藤原眞興等、衛士若干人を率ゐて護送せるのみ。嗚呼、昨は臺閣の寵臣、今は邊陲の遷客、何等の轉變、何等の悲惨ぞや。住みなれし紅梅殿を出づる時、平生愛せる庭前の梅花を見て、悽惻の情に勝へず、一首を詠じて曰く、
こち吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしこて
春なわすれそ
京を離れて後數日、夫人に送れる歌あり。

【参考資料】
類聚國史 二百五卷の中現存せるは六十一卷。寛平四年菅原道眞の撰進せし國史にて、神祇・帝王・歲時・政理・佛道・風俗等の項目によりて類を以て聚めたるものなり。
菅家文章 十卷。菅原道眞の詩文集なり。別に菅公貶謫後に成れる詩を集めたるもの菅家後集一卷あり。

延喜 醍醐天皇の御宇。
太宰府 福岡縣筑紫郡水城村にその址あり。
小男・小女 大鏡に、「幼くおはしける男君女君、たち慕ひ泣きておはしければ、小きはあへなむとおほやけも許さしめ給ひしかば、共にゐて下り給ひしぞかし」とあり。
藤原眞興 傳未詳。

君がすむ宿のこずゑをゆくくもかくるゝまでに
反り見しはや

敕使藤原眞興は攝津に於て公に別れ、右衛門少尉善友益友、
衛士二人を率ゐ、代つて筑紫に赴く。當時の太政官の官符を
見れば、公は殆ど純然たる囚人にして、任中俸を賜はるること
もなかりしなり。

公の前途や實に慘憺たりと謂ふべしかの白樂天が北窓
三友を想うて、二十八韻の詩を作りたるは、蓋しこの時なり。
その中に自ら境遇を述べて曰く、

自從敕使驅將去	父子一時五處離
口不能言眼中血	俯仰天神與地祇
東行西行雲渺々	二月三月日遲々
重關警固知聞斷	單寢辛酸夢見稀

一門生 味酒安行といふ。
傳不詳。
善友益友 傳未詳。

白樂天 唐の詩人。名は居易。諸官を経て刑部尙書に至る。



(卷繪起縁神天崎松) 殿 梅 紅

山河邈矣隨行隔

風景黯然在路移

平到謫所誰與食

生及秋風定無衣

古之三友一生樂

今之三友一生悲

古不同今今異古

一悲一樂志所之

字々人の腸を斷つ。行きく、て河内の國土師の里に至り、道明寺に次る。道明寺は菅家歴代の菩提寺にして、當時菅公の姨覺壽尼あり。蓬萍一たび別れなば、いづれの時を期してか相會するを得ん。公惜別の情を歌うて曰く、

鳴けばこそわかれをいそげ
鶏の音のきこえぬさ
このあかつきもがな

播磨の國明石の驛に宿れる一夜、驛長公を見てその轉變の甚しきに驚く。公乃ち一聯を作りて自ら慰めて曰く、

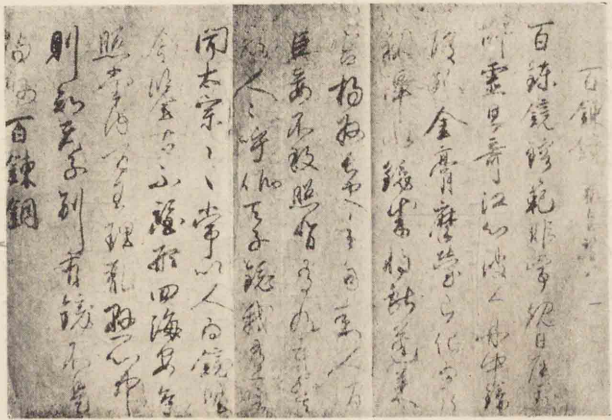
驛長莫驚時變改
一榮一落是春秋

三友 琴詩酒。

土師の里 大阪府南河内郡道明寺村。
道明寺 又土師寺といふ。
今は眞言宗の尼院なり。

明石の驛 今の兵庫縣明石市。

山河邈たり行くに随つて隔り、風景黯然として路に在つて
移る。長亭短亭幾たびか公を送迎し、日を積み月を重ねて、公



治家たりしや、煩惱内に公を苦しめ、讒奸外に公を陥れ、遂に

●は遂に太宰府の配處に到る。

太宰府の配處は公に取りて

傳 絶好の詩境なりき。外に名利の

昔 競争なく、内に危殆の憂悶なし。

原 公や靜かに往時を懷慕し、現境

道を思料し、詠歎によりてその衷

眞 情を遣るべきなり。天は公に授

筆 くるに詩人の天分を以てし、而

して、まづ公に與ふるに政治家

の境遇を以てしたりき。公の政

百鍊鏡 辨皇鑿也
百鍊鏡、鑄範非常規。日辰
處所靈且奇、江心波上舟中
鑄。瓊粉金膏磨瑩已、化爲
一片秋潭水。鏡成將、獻蓬萊
宮。揚州長史手自封、人間臣
妾不敢照。背有、九五飛天
龍、人々呼作、天子鏡。我有
一言聞、太宗、太宗常以、人
爲、鏡、鑿、鑿、鑿、古不鑿、形
四海安危照、掌內、百王理亂
懸、心中、乃知天子別有、
鏡、不是揚州百鍊銅。

out

公をして無告の流人たらしめき。然れども、悲しいかな、かく
の如くなるに非ずんば、公は遂に詩人たる能はざりしなら
ん。而も公は死に至るまでこの天分の地に居るを悲しみ、靜
かに春秋の榮落を觀じて、何時か昔日の榮華に歸るあらん
事を望みたりき。この憂愁と希望との現るゝ所に、公の天分
は遂に大成せられたり。而して公自らは毫もこれを知らざ
りしなり。嗚呼天道の冷酷無情、一に何ぞこゝに至るや。

太宰府における公の詩は多からず。然れども一言一句と

雖も性靈の聲ならざるはなし。文字時に洗鍊ならず、藻思必

ずしも巧緻ならず。雖も眞情常に紙面に汪溢して、公の面

目躍如たるを覺ゆ。これを南海の詩に較ぶれば、意更に摯實、

情更に痛切、感極るところ人をして卒讀に堪へざらしむ。詩

もこゝに到りては徒に技巧のみにあらざるなり。薨ずる前

南海の詩 公は仁和元（一
五四五）年、讃岐守に任ぜ
られて、その任に赴く。
その當時の詩を指す。

集めて一卷をなし、封緘して紀長谷雄に送る。長谷雄これを見、天を仰いで歎息せりといふ。今の菅家後集これなり。

離家三四月、落涙百千行、

萬事皆如夢、時々仰彼蒼、

これその卷頭の詩なり。公が昨今の轉變眞に一夢に較ぶべし。その筑紫に在るや、門を杜ぢて一步も外に出でず。都府樓近し、雖も纔に瓦の色を望み、觀音寺遠からず、雖もたゞ鐘の聲を聞くのみ。警吏の門を守るにあらざれども、公自ら檢束して遙かに謹慎の意を致ししなり。

一從謫落在柴荆、萬死兢兢踏踏情、

都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲、

中懷好逐孤雲去、外物相逢滿月迎、

此地雖身無檢繫、何爲寸步出門行、

紀長谷雄 文章博士。道眞の門人。延喜十二(一五七二)年歿す。年六十八。菅家後集一卷。道眞の詩文集。菅家文章の續篇なり。

都府樓 福岡縣筑紫郡水城村にその址あり。觀音寺 觀世音寺。同村にあり。

秋氣漸く催して、旅雁渡るこゝ頻なり。憐むべし、公は猶何時かは都に還る日あるべきを思量して、一縷の望を繫ぎしなり。偶、旅雁を見て遙かに情を託す。何ぞそれ悽愴たる。

我爲遷客汝來賓、共是蕭々旅漂身、

敲枕思量歸去日、我知何歲汝明春、

重陽の佳節は來れり。而も公は獨り敗屋に愁臥するのみ。遙かに去年の今夜清涼に侍せしを憶へば、感慨何ぞ勝へんや。

去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸、

恩賜御衣今在此、捧持每日拜餘香、

十日去つて十五日來る。月光鏡に似たれども罪を明かにする無く、風氣刀の如けれども愁を破るに由なし。顔容日に衰へて千里誰にか訴へん。

黃萎顔色白霜頭、況復千餘里外投、

重陽 九月九日の節供。

昔、被^レ榮華、簪^リ組^リ縛^リ、
月光似^ク鏡、無^シ明^ノ罪^ヲ、
隨^ヒ見^ル隨^ヒ聞^ク皆^ク慘^シ慄^シ、

今、爲^ル貶^シ謫^シ草^ノ萊^ノ囚^ト、
風氣如^ク刀、不^レ破^ラ愁^ヲ、
此^ノ秋^ニ獨^リ作^ル我^ノ身^ノ秋^ト。

罪無くしてこの流竄に遇へり。雖も公は一度も君王の不
明を恨み、奸臣の讒構を怒りし。ここあらず。偏に一身の不遇
を歎じて天命の否塞を悲しみたるのみなり。唯その身の
罪無くして汚名を千歳に遺すは、公の忍ぶ能はざる所なり。
故に公の詩や、もすればこの事に及ぶ。されどかくの如き
境遇にありて、なほ君恩を感謝す。以て公の性格の甚だ高く
して且美なるを見るべきなり。

公に又和歌の詠あり。以て當時の境遇を想ふべし。ある夕
べ、をちかたに煙のたつを見て、

夕されば野にも山にも立つけぶりなげきよりこそ

燃えまさりけれ

雲の浮き漂ふを見て、

山わかれ飛びゆく雲のかへり來るかげ見る時ぞな

ほたのまる

雨の降る日、

天のしたかわけるほごのなければや著てしぬれ衣

ひるよしもなき

野をよみて、

つくしにも紫おふる野邊はあれどなき名かなしむ

人ぞきこえぬ

延喜三年二月二十五日、公はかくの如き慘愴たる事情の下
に病歿せり。時に年五十九。京師を出でしより二箇年餘。その
墓處を安樂寺といふ。越えて二年、公の隨臣味酒安行始めて



紫
安樂寺 福岡縣筑紫郡太宰
村。

神殿を安樂寺に立て、天滿大自在天神と稱せり。
かくの如く、太宰府の左遷は、嘗に公をしてその詩人の天
分を全うせしめたるのみならず、その人物の上にも一層の
品位を加へしめたるなり。(高山樗牛「樗牛全集」)

一字千金、二千金、三千世界の寶ぞと、教ゆる人に習ふ子の、中
に交はる菅秀才、武部源藏夫婦の者、勞り傳き我が子ぞと、人目
に見せて片山家、芹生の里へ所替え、子供集めて讀書の、器用不
器用、清書を、顔に書く子と手に書く子と、人形書く子は頭搔く。教
ゆる人は取分けて、世話をかくとぞ見えにける。中に年かさ五
作が息子、これ皆これ見や。お師匠様の留守の間に、手習するは
大きな損。おりや坊主頭の清書したと、見せるは十五の涎くり。
若君はおとなしく、一日に一字學べば、三百六十字の教。そんな
こと書かずとも、本の清書したがよいと、八つになる子に呵ら
れて、涎ませよと、指ざして、誂戲かゝるを、殘の子供、兄弟子
に口過ごす、涎くりめをいがめてやろと、手ん手に壓尺振りま
はす。自然天然肩持つも、傳ふる筆の威徳かや。(菅原傳授手習鑑)

高山樗牛 哲學者。文學博
士。名は林次郎。仙臺の人。
明治三十五年歿す。年三十
二。

參考資料

菅原傳授手習鑑 五段。
竹田出雲の作。菅公配
流の史實を本とし、之に
種々の傳説を加へて綴
れり。參考書には、
山本九馬「淨瑠璃通解」

七 世繼の物語

さいつ頃、雲林院の菩提講に詣でて侍りしかば、例の人よ
りは、こよなく年老いうたてげなる翁二人、嫗と來あひて、同
じ處にゐぬめり。あはれに同じやうなるもの、のさまかなと
見侍りしに、これら打笑ひ見かはしていふやう、年頃昔の人
に對面して、いかで世の中の見聞く事ごもをきこえあはせ
む、この只今の入道殿下の御有様をも申しあはせば、やと思
ひしに、あはれに嬉しくも逢ひ申したるかな。今ぞ心やすく
よみぢもまかるべき。思しき事はぬはげにぞ腹ふくる、
心地しけるか、ればこそ、昔の人は物いはまほしくなれば、
穴を掘りては言ひいれ侍りけめと覺え侍る。返すく、嬉し
く對面したるかな。さても幾つにかなり給ひぬる。こいへば、

參考資料

大鏡 八卷。世繼物語と
もいふ。作者不詳。文徳
天皇より後一條天皇ま
で百七十餘年間の歴史。
參考書には、

大石千引「大鏡短觀抄」
落合直文「小中村義象」天
鏡詳解
佐藤 球「大鏡詳解」
關根正直「大鏡新註」

雲林院 京都府葛野郡雲林
院村。
うたてげ 異様なるの意。
入道殿下 藤原道長。

今一人の翁、幾つこいふことは更に覚え侍らず。たゞし己は、故太政の大臣貞信公の藏人の少將を申し折の小舎人童大犬丸ぞかし。ぬしはその御時の母后の宮の御方の召使、高名の大宅の世繼をぞいひ侍りしかしな。さればぬしの御年は、己にはこよなくまさり給ひつらむかし。みづからは小童にてありし時、ぬしは二十五六ばかりの男にてこそはいませしか。こいふめれば、世繼しかく、さ侍りしこそなり。さてもぬしの御名は如何にぞや。こいふめれば、故太政大臣殿にて、元服仕うまつりし時、汝が姓は何ぞ。仰せられしかば、夏山となむ申すこ申ししを、やがて繁樹となむつけさせ給へりし。なごいふに、いごあさましくなりぬ。

誰も少しよろしき者どもは、見おこせ、およりなごしけり。年二十ばかりなるなま侍めきたるもの、切に近く寄りて、

貞信公 藤原忠平。
藏人の少將 近衛少將にて
藏人を兼官せるをいふ。
小舎人 藏人所に屬した
る召使の童。
母后の宮 宇多天皇の御
母、光孝天皇の皇后班子。

故太政大臣殿 貞信公。

なま侍 なまは未熟の意。
青侍 さいはんが如し。

「いで、いと興ある事いふ老者達よな。更にこそ信ぜられぬ。」こいへば、翁二人見かはしてあざ笑ふ。繁樹を名乗るが方さまに見やりて、ぬしは幾つこいふ事覚えすこいふめり。この翁どもは覚え給ふや。こ問へば、更にもあらず、一百五十歳にぞ今年はなり侍りぬ。されば繁樹は百四十には及びてさぶらふらめ、やさしく申すなり。己は水尾の帝のおりおはします。年の正月の望の日生まれて侍れば、十三代にあひ奉りて侍るなり。怪しうはさぶらはぬ年なりな。まここ人々思さじ。されど父がなま學生につかはれ奉りて、下臈なれども都ほごりこいふ事侍れば、目を見給へて、産衣に書きおきて侍りける。未だ侍り丙申の年に侍り。こいふも、げにこ聞ゆ。今一人に、猶も翁の年こそ聞かまほしけれ。生まれけむ年は知りたりや。それにていこやすく數へてむ。こいふめれば、これ

水尾の帝 清和天皇。

十三代 清和・光孝・陽成・宇
多・醍醐・朱雀・村上・冷泉
圓融・花山・一條・三條・後
一條。

學生 大學寮の學生。

都ほごり 京近傍の生まれ。
目を見給へて 目をかけら
れての意。

丙申の年 清和天皇貞觀十
八(一五三六)年。

は實の親にもそひ侍らず、他人のものに養はれて十二三までぞ侍りしかば、はかしくしうも申さず。只「我は子生むわざもしらざりしに、主の御使に市へまかりしに、又私にも錢十貫を持ちて侍りけるに、憎げもなき乳兒を抱きたる女の、これ人に放たむこなむ思ふ、子を十人まで生みて、これはし十人の子にて、いこゞ五月にさへ生まれて、むづかしきなりといひ侍りければ、この持ちたる錢にかへて來にしなり。」と。姓は何さかいふと問ひ侍りければ、夏山とは申しける。さて十二三にてぞ、おほき大殿には参り侍りし。なごいひて、さても嬉しく對面したるかな。佛の御靈驗なめり。年頃こゝかしこの説經この、しれど、何かはこて参り侍らず。かしこくも思ひたちて参り侍りにけるが嬉しき事。こて、そこにおはするは、その折の女人にや見えますらむ。こいふめれば、繁樹が應

我は云々 大大丸の養父の詞。

五月に云々 下學集に、「五月、月子不養」註に「五月、子必害父母」

おほき大殿 太政大臣忠平。

へ、いでさも侍らず。それは早う失せ侍りにしかば、これはその後相添ひて侍る童女なり。さて閣下はいかに。こいふめれば、世繼が應へ、それは侍りし時のなり。今日も諸共に参らむと出でたち侍りつれど、瘡病をして、あたり日に侍りつれば、口惜しうもえ参り侍らずなりぬ。など、あはれに言ひ語らひて泣くめれど、涙落つこも見えず。

閣下 世繼をさしていふ。

かくて講師待つほごに、我も人も久しうつれくゝなるに、この翁ごものいふやう、いでさうくゝしきに、いざ給へ、昔の物語して、このおはさう人々に、古の世はかくこそはありけれと聞かせ奉らむ。こいふめれば、今一人、しかくゝ、いと興ある事なり。いで覚え給へ。時々さるべき事のさしいらへ、繁樹も打覚え侍らむかし。こいひて、いはむくゝと思ひたるけしきごも、何時しかと聞かまほしく、奥ゆかしき心地するに、そ

覚え給へ 語り給への意。

こらの人多かりしかど、物はかぐしく聞きわき耳ごむるもあらめど、人目にあらはれては、この侍ぞよく聞かむことあごうつめりし。世繼がいふやう、世はいかに興あるものぞや。さりとも翁こそ少々の事は覺え侍らめ。昔さかしき帝の御政事の折は、國の中に老いたる翁、姫やあること召し尋ねて、古のおきての有様を尋ね問はせ給ひてこそは、奏する事を聞召し合はせて、世の政は行はせ給ひけれ。されば老いたる身は、いごかしごきものに侍り。若き人達思しな侮りそ。さて、黒柿の骨の九つあるに、黄なる紙はりたる扇をさし隠して、けしきだち笑ふほごも、さすがにをかし。まめやかに世繼が申さむご思ふことは、他事（ヒタコト）かは、只今の入道殿下の御有様の、世に勝れておはしますことを、道俗男女の御前にて申さむご思ふが、いご事（ヒゴト）多くなりて、あまたの帝后、また大臣・公卿の

あごうつ 話を合はする意。

法華經 妙法蓮華經の略。八卷二十八品。

五時教 華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃。

御上をいひつゞくべきなり。その中に、さいはひ人におはしますこの御有様を申さむご思ふほごに、世の中の事のかくれなくあらはるべきなり。傳聞に承れば、法華經一部を説き奉らむとてこそ、まづ餘經をば説き給ひけれ。それをなづけて五時教（ヒトキノシノトウ）といふにこそはあなれ。しかの如くに、入道殿の御榮を申さむご思ふほごに、餘經の説かることいひつべし。なごいふも、わざ／＼しうこと／＼しう聞ゆれど、いでやさりとも何ばかりの事をかご思ふに、いみじうこそいひ續け侍りしか。

世間の攝政・關白ご申し、大臣・公卿ご聞ゆる、古へ今皆この入道殿の御有様のやうにこそはおはしますらめごぞ、今様の乳兒ごもは思ふらむかし。されごも、それさもあらぬことなり。いひもていけば、同じ種一つ筋にぞおはすめれど、門わ

かれぬれば、人々の御心もちひも、又それに隨ひてこころになりぬ。この世始りて後、帝はまづ神の世七代をおき奉りて、神武天皇を始め奉りて、當帝まで六十八代にぞならせ給ひにける。すべからくは神武天皇を始め奉りて、次々の帝の御次第を覚え申すべきなり。然りこいへども、それはいと聞き耳遠ければ、たゞ近きほごより申さむと思ふに侍り。文徳天皇と申す帝おはしましき。その御世よりこなた、今の帝まで十四代にぞならせ給ひにける。世を數へ侍れば、その帝位に即かせ給ふ嘉祥三年庚午の年より今の年までは、一百七十六年ばかりにやなりぬらむ。かけまくもかしこき君の御名を申すは、かたじけなくさぶらへども。さて、いひつゞけ侍りき。〔大鏡〕

神の世七代 國之常立神
豐雲野神 宇比地邇神 角
杵神 意富斗能地神 游母
陀琉神 伊邪那岐神
當帝 後一條天皇

今の年 萬壽二一六八五
年。

八 法成寺の造營

今は御心地例ざまになりはてさせ給ひぬれば、御堂のこ
ご思し急がせ給ふ。攝政殿國々までさるべき公事をばさる
ものにて、まづこの御堂のこころを先に仕うまつるべき仰言
宣ふ。殿の御前も、この度生きたるは別事ならず。この願の協
ふべきなめり。と宣はせて、他事なく唯御堂におはします。
方四町をこめて、大垣にして瓦葺きたり。さまざまに思し
おきて急がせ給へば、夜の明るるも心元なく、日の暮るゝも
口惜しう思されて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池を掘
るべきさま、樹を栽ゑなめさせ、さるべき御堂御堂、方々様々
つくりつゞけ、御佛はなべての様にやはおはします。丈六の
金色の佛を數も知らず造りなべ、そなたをば北南と馬道を

〔參考資料〕
榮華物語 四十卷、世繼
物語ともいふ。作者不
詳。その卷名は月宴・花
山・さまざまの悦・見は
てぬ夢・浦々のわかれ・
輝く藤壺・とりべ野・初
花・岩蔭・日蔭のかづら・
つばみ花・玉の村菊・木
綿四手・淺緑・疑もとの
平・音楽・玉の臺・御裳着
御賀・後梅の大將・鳥の
舞・駒くらべ・若枝嶺の
月・楚王の夢・衣の珠・若
水・玉のかざり・鶴の林
殿上の花見・歌合・着る
は佗しと歎く女房・晚待
星・蛛のふるまひ・根合
煙の後・松の下枝・布引
の瀧紫野にて、宇多天皇
より後朱雀天皇までの
ことを載せ、ことに藤原
道長のことを詳述せり。
參考書には、

あけて、道を整へ作らせ給ひて廊渡殿數多く作らせむなご

おぼし給ふに、鶏の鳴くも久し

くおぼされ、宵曉の御行も怠ら

ず、安きいも大殿ごもらず、たゞ

この御堂のここのみ深く御心

にしませ給へり。

日々に多くの人々参りまか

で立ちこむ。さるべき殿原をは

じめ奉りて、宮々の御封、御庄ご

もより、一日に五六百人、千人の

夫ごもを奉るにも、人の數多か

ることをば畏きことに思した

り。國々の守ごも、地子官物はおそなはれごも、只今はこの御



法成寺建築の古畫

三條西實隆「榮華物語抄」
大石千引「榮華物語抄」
岡本保孝「榮華物語抄」
和田英松・佐藤球「榮華
物語詳解」

法成寺 京都市京極の東、
荒神口の北に當る地に在
りき。

攝政殿 藤原賴通。道長の
長子、世に宇治關白と稱
す。承保元（一七三四）年
薨す。年八十三。

殿の御前 藤原道長。
大垣 總廻りの垣なり。
山を疊む云々 築山の配置
をいふ。

栽ふなめさせ 植ふならべ
なべての様云々 普通の様
ならずこの意。

馬道 長廊下のこと。

地子 公田を人民に貸與
し、秋に至りて若干の稻
を納めしむるもの。

堂の夫役、材木・檜皮・瓦など多く参らすることを、我も我もこ
競ひ仕うまつる。

大方近きも遠きも参りこみて、品々、方々あたりく、に仕

うまつる。或處を見れば、御佛仕うまつるごと、佛師ごも百人

ばかりなみ居て仕うまつる。同じくはこれこそめでたけれ

ご見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ごも二三百人のぼり居

て、大きな木ごもには、大綱をつけて聲を合はせて、えさま

さご引上げさわぐ。御堂の内を見れば、佛の御座づくりかゞ

やかす。板敷を見れば、木賊・棕の葉などして、四五十人手ごこ

になみ居て磨き拭ふ。檜皮葺・壁塗・瓦作なども數を盡くした

り。又年老いたる翁なごの、三尺ばかりの石を心に任せて切

りご、のふるものあり。池を掘るごと、四五百人おりたち、山

を疊むごと、五六百人のぼり立ち、又大路の方を見れば、力車

にえもいはぬ大木ごもに綱をつけて叫びの、しり引きも
 てのぼる。鴨川の方を見れば筏さいふものに、樽材木を入れ
 て、棹さして心地よげに歌ひの、しりてもてのぼるめり。大
 津梅津の心地するも、西は東さいふことはこれなりけりこ
 見ゆ。磐石さいふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來
 れど沈まず。すべて色々様々言ひつくし、まねびやるべき方
 なし。かの須達長者の祇園精舎造りけむもかくやありけむ
 に見ゆるを、冬の室、夏の風各、こころなり。
 かゝる御勢にそへて、入道させ給ひて後は、いごゞ勝ら
 せ給へり。見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御
 有様かな。近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は遙かに拜
 みまゐらす。今はこの御堂の邊りの本草ともならむと思へ
 る人のみ多かりき。そなたさまに赴けば、海の浪も柔かに立

大津 大津市。
 梅津 京都府葛野郡。

須達長者 釋迦在世當時の
 舍衛國の富者。波斯匿王
 の大臣。
 祇園精舎 印度の寺の名。
 釋迦說法の道場。

ちて、この御堂の物をもて運ばせ、河も水すみて快く浮かべ
 もてまゐるこ見ゆ。〔榮華物語〕

わが國の文藝は佛教の感化甚深なり。聖徳太子の佛教興隆は
 奈良時代に及びて、彫塑に千古無比の名を博せりと雖も、繪畫は
 未だこれに伴はず。平安時代に巨勢金岡が出でし頃より、漸く
 丹青全盛の世は來れるなり。按ふに、平安時代の形式美偏重が佛
 教に現れては、形相の具足によりて、内心の信仰に近づくべしと
 したり。法成寺法勝寺の如きは、今廢墟をだに存せざれど、金堂講
 堂、七寶莊嚴、天を摩する大塔、虹を曳く廻廊の情態は、現存する鳳
 凰堂に、その一端を覗ふべし。香煙徐ろに薫じて、幢幡を掠め、蓮華
 頻りに散つて轉讀に比ふ。龍頭の舟は池上に浮かんで、笙鼓月に
 冴え、頻迦の袖は庭前に翻りて、舞容風に堪へず。恰もこれ坐なが
 らなる極樂淨土。かくの如き處に用ひられし繪畫は、彩華炫耀、丹
 碧映射、その色は珊瑚、水晶を碎き、その線は黄金の箔を切り、或は
 慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十分に濃く、あくまで鮮かにして、後世の
 乾枯灑脫なるものとは全くその選を異にしたること、想見する
 に足る。(藤岡作太郎の文による)

巨勢金岡 畫家。巨勢派の
 祖。清和天皇以下五朝に
 歴仕せり。描く所佛畫多
 し。
 法勝寺 京都市白川にあり
 し寺。白河天皇の勅願に
 よりて建立せり。

九 流泉・啄木

今は昔、源博雅といふ人ありけり。延喜の御子兵部卿親王の子なり。萬づのこごやんごごなかりける中にも、管絃の道になむ極みたりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえもいはず吹きけり。この人村上の御時に殿上人にてありけり。その時に逢坂の關に一人の盲庵めくらを造りて住みけり。名をば蟬丸せみまるとぞいひける。これは敦實あつじと申しける式部卿の御宮の雜色ざしきにてなむありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなむ微妙に弾く。

然る間、この博雅この道を強ちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞

【参考資料】

今昔物語 六十卷。宇治大納言物語ともいふ。源隆國の著なり。天竺・震旦・本朝の小話を収録せるものにて、毎篇の始を「今は昔」の語にて筆を起せり。参考書には、岡本保孝「今昔物語出典考」、芳賀矢一「考證今昔物語」、坂井衡平「今昔物語の新研究」

源博雅 琵琶の名手。克明親王の長子。博雅三位と稱す。天元三（一六四〇）年歿す。年六十二。延喜 醍醐天皇の御宇。兵部卿の親王。克明親王。村上 第六十二代の天皇。逢坂 大津市の南、京都府と滋賀縣の界にあり。

かまほしく思ひけれども、盲の住家こごやうなれば行かずして、人をもて内々に蟬丸にいはせけるやう、なご思ひかけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし。こ盲これを聞きて、その答をばせずして曰く、

よの中はこごてもかくても過してむ宮も藁屋もはてしなれば

こ。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくく覺えて思ふやう、我強ちにこの道を好むによりて、必ずこの盲に會はむと思ふ心深く、それに盲命あらむこごも測り難し、また我も命を知らず、琵琶に流泉・啄木といふ曲あり、これは世に絶えぬべきことなり、唯この盲のみこそこれを知りたるなれ、かまへてこれが弾くを聞かむと思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を彈

敦實 宇多天皇の第八皇子。宇多源氏の祖。康保四（一六二七）年歿す。年七十五。

くことなかりければ、その後三年の間、夜な／＼逢坂の盲が庵の邊りに行きて、その曲を今や弾く今や弾くと密かに立聞きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはかげりて、風少し打吹きたりけるに、博雅あはれ今宵は興あり、逢坂の盲今夜こそ流泉、啄木は弾くらめと思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶を搔鳴らしめて、物あはれに思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞くほごに、盲獨り心を遣りて詠じて曰く、

逢坂の關のあらしのはげしきにしひてぞゐたる世を過すこて

こて琵琶を鳴らしたるに、博雅これを聞きて、涙を流して、あはれと思ふこと限なし。盲獨言に曰く、あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬすきものや世にあらむ。今夜心得たらむ人

の來よかし。物語せむ。といふを、博雅聞きて聲を出して、王城に在る博雅といふものこそこれに來たれ。といひければ、盲の曰く、かく申すは誰にかおはします。と博雅の曰く、我はしかくの人なり。強ちにこの道を好むによりて、この三年この庵の邊りに來つるに、幸ひに今宵汝に會ひぬ。と盲これを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語なごして、博雅、流泉、啄木の手を聽かむ。といふ。盲、故宮はかくなむ。弾き給ひし。こて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、唯口傳をもてこれを習ひて、返す／＼喜びて、曉に歸りにけり。

これを思ふに、諸の道は唯かくの如く好むべきなり。それに近代はげに然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸卑しきものなり。と雖も、年頃宮の弾き給へる琵琶を

聽きて、かく極めたる上手にてありけるなり。それが盲になり
にければ、逢坂にはあたるなりけり。それより後、盲の琵琶
は世に始れるなり。さなむ語り傳へたるさや。〔今昔物語〕

劍

白銀の目貫の太刀をさげ佩きて、奈良の都をねるは誰が子ぞ、
ねるは誰が子ぞ。本

石の上、ふるや男の太刀もがな。組の緒垂でて宮路通はむ、宮路
通はむ。末〔神樂歌〕

老鼠

西寺の、古い鼠、わか鼠、御裳つんづ、袈裟つんづ、袈裟つんづ。法師
に申さん、師に申せ。法師に申さん、師に申せ。〔催馬樂〕

早春

氣霽風梳新柳髮、氷消浪洗舊苔鬚。春 暖 都良香
螢、日、螢、風、高低、千、顆、萬、顆、之、玉、染、枝、染、浪、表、裏、一、入、再、入、之、紅。花光 水上
浮序、管。〔和漢朗詠集〕

一〇 長谷寺

頼み難きは我が心なり。事あれば忽ちに移り、事なきも亦
動かん。生じ易きは魔の縁なり。念を恣にすれば直ちに
發り、念を正しうするも猶起らん。この故に心は大海の
浪と揺ぎて定まる時なく、縁は荒野の草と萌えて盡くる。期
あらねば、偶々大勇猛の意氣を鼓して、不退轉の果報を得ん。こ
する者も、今日の縁にひかれて、舊年の心を失ふ輩は、可惜舟
を出して彼岸に到り得ず、憂しや道に迷ひて穢土に復還る
に至る。されば心を治むるは靈地に身を寘くより好きは無
く、縁を遮るは淨業に思を傾くるを最も勝れたり。さなす。木
片の薬師、銅塊の彌陀は、皆これ我が心と呼ぶの設け、崇め尊
まぬはをこなるべく、高野の蘭若、比叡の佛刹、いづれか道の

参考資料

神樂歌催馬樂 各一卷。
神を祭るために奏する
樂の歌詞。参考書には、
藤原師長「仁智要録」
一條兼良「梁塵愚案抄」
賀茂真淵「神樂催馬樂
考」
本居大平「神樂歌新釋」
橘守部「神樂催馬樂
入綾」
和漢朗詠集 二卷。藤原
公任の撰。和歌と漢詩の
佳句との朗詠の資料た
るべきものを集む。参考
書には、
北村季吟「和漢朗詠集
註」
岡西惟中「和漢朗詠集
諺解」
金子元臣・江見清風「和
漢朗詠集新
釋」
柿村重松「倭漢朗詠集
考證」

長谷寺 奈良縣磯城郡初瀬
町にあり。

不退轉の果報 永久不變の
快樂。

高野の蘭若・比叡の佛刹

念を勵まさざらん。參り至らざるは愚かなるべし。古の人の麻の袂を山おろしの風に翻し、法衣ころもの裾を野路の露に染めつゝ、東西に流浪し、南北に行きかひて、幾干いくその坂に谷に走り、疲れながら猶辛しともせざるものは、心を靈地の靈氣に涵し、念を淨業の淨味に育みて、正覺の曉を期すればなり。鏡に對ひては髮の亂れたるを愧ぢ、金を懷にすれば慾たかぶの亢たかぶるを致す習ひ、善くも悪しくも其の境に因り其の機に隨ひて、凡夫の思惟は轉ずるなれば、たゞ後の世を思ふものは、眼に佛菩薩の尊容を仰ぎ、口に經陀羅尼の法文を誦じゆして、夢にも現にも市店榮華の巷に立入ること無く、朝も夕べも山林閑寂の郷に行ひすましてあるべきなり。

高野山・比叡山の寺院をいふ。闍若は靜かにして空なる處の意の梵語にて寺院のこと。

正覺の曉 悟道に達したる時。

經陀羅尼 咒經なり。

首を回らせば住時ひかしをかしや。世の春秋に交はりて、花には喜び、月には悲しみ、由無き七情の往來に、泣きみ笑ひみ過し

七情 佛教にては、喜怒哀憂

しが、思ひたちぬる墨染の衣を纏ひしより、今ははや指をかがなふれば、十餘り三とせに及びて秋も暮れたり。修行の年も漸く積りぬ。身もまた初老に近づきぬ。さすが心も澄渡りて、亂るゝことも少くなり、舊縁は漸く去り盡くして、胸に纏はる雲もなし。忽然として其の初一人來りし此の娑婆に、今は孑然として一人立つ。待つは機このみの熟して果このみの落つる我が命終みづじゆうの時のみなり。あら快こころよの今の身よ。氷雨降ることも、雪降ることも、憂を知らぬ雲の外に嘯こゝろき立てる心地して、浮世の人の厭ふ冬さへ、却つてなかくゝをかしと見る此の我が思の長閑けさは、空飛ぶ禽も啻ならず。されど禪悅ぜんえつに著するも、亦これ修道の過失あやまちと聞けば、ひとり一室に籠りゐて、驕慢の念を萌さんよりは、歩を處々の靈地に運びて、寺々の御佛をも拜み奉り、勝縁を結びて魔縁を斥け、佛事に勤めて俗事に遠ざ

懼愛憎怒をいふ。

禪悦云々 禪悦は修行して得らるゝ所の禪味の樂みなり。之に執着するも亦一つの誤りなり。

からん方賢かるべしとて、其處に一日、彼處に二日と、この御佛かの御佛の別ちもなく、それ／＼の御堂を拜み巡りては、或は祈願を籠めて參籠の誠を致し、或は和歌を奉りて讚歎の意を表はし來りけるが、佛天の御思召にも協ひけん、聊か冥加もありと思しく、幸ひに道心の外の他心も起さず、勝縁を妨ぐる魔縁にも遇はで、終に今日に及ぶを得たり。既往の誠に欣ぶべきに、將來の猶頼ままほしく、長谷の御寺の觀世音菩薩の御前に、今宵は心ゆくほご法施をも奉らんこ立出でたるが、夜々に霜は募りて、樹々に紅は増す神無月の空のや、寒く、夕日力なく春づきて、晚れし百舌鳥の聲のみ残る。暮方の哀さの身に浸むことかな。見れば路の邊の草のいろ、それとても分かず、皆何れも同じやうに枯果てて、崩折れて偃せり。珍らしからぬ冬野のさま、取出でていふべくは

あらねども折からの我が懐おもひに合ふところあり情こころを結び詞を束ねて、歌うたもならばなして見ん。お、それよ。
さまざまに花咲きたり見し野邊の同じ色にも霜枯れにけり

末松山

仲房

あはれゆみうらみちもものたごころよわ
ほのろろのあはれこそこのころい

西行筆蹟

嗚呼我人とも終にはかく男女美醜の別ちもなく、同じ色に霜枯れんに、何の翡翠の髪かみの狀さま花はなの笑あはれの顔かほかあらん。まして夢を彩る五欲ごよくの歡樂たのしみ、幻まぼろしを織る四季の遊あそび、娛たのしみ、いづれか虚うつ妄はらならざらん。たゞ勤むべきは菩提の道、南無佛々々々觀

末松山 仲房
あつさゆみたなびくもの
たえまよりほのかにみゆる
すゑのまつ山

五欲 色聲香味觸の欲
念。

じ捨てて、西行獨り路を急ぎぬ。
 弓張月の漸う光りて、入相の鐘の音も收る頃、西行は長谷寺に著きけるが、訪ひ驚かすべき法の友の無きにはあらねど、訪ひも寄らで、觀音堂に参り上りぬ。さなきだに梢透きたる樹々をなぶりて、夜の嵐の誘へば、はらく、散る紅葉なごの、空に狂ひて吹入れられつ、法衣の袖にかゝるも哀に、また佛前の御燈明の目瞬しつ、萬づの物の黒み渡れるが中に、いと幽かなる光を放つも趣あり。法華經の品第二十^{はん}五を聲低う誦するに、何となく平時よりは心も締りて、身に浸み渡る思のすれば、猶誠を籠めて誦して行くに、天も靜けく、地も靜けく、人も全く靜まりたる、時といひ處といひ、相應して我が耳に入るは我が聲ながら、若しくは隨喜佛法の鬼神なんごの、聲を和せて共に誦するかと疑はるゝまで、上な

隨喜佛法の鬼神 佛法守護の神。

西行 歌僧。俗名佐藤義清。鳥羽上皇に仕へて北面の士たり。二十三歳にして出家し、四方に周遊す。建久元（一八五〇）年寂す。年七十三。

く殊勝に聞え渡りぬ。特に参りたる甲斐はありけり、菩薩も定めしかゝる折のかゝる所作をば善哉として、必ず納受し給ふべし、今宵の心の澄切りたる、この清しさを何に比へん、餘りに有り難くも尊く覺ゆれば、今宵は夜すがら、この御堂の片隅に趺坐なして、曉天がたになほ一度誦經し参らせて、さて其の後香華をも淨水をも供して罷らん、西行やがて三拜して、御佛の御前を少し退り、影暗き一隅に身をねぢ裾ゑ、凍れる水か枯れし木の、動きもせねば音も立てず、寂然として坐し居たり。
 夜は沈々と漸く更けて、風も睡れる如くになりぬ。右左に竝びて立ちたりける御燈明は、一つ消え、又一つ消えぬ。今は只いと高き吊燈籠の光朦朧として力なきが、夢の如くに殘れるのみ。此の寺の僧どもは寒氣に怯びて、所化寮に爐をや

所化寮 僧侶の起臥する所。

圍みてあるらん影だに終に見するもの無し。いふべき方もなく静かなれば、日比焼きたる餘氣なるべし、今薰ゆるこにはあらぬ香の、有るか無きかに自ら匂を流すも、いと能く知らる。かゝる折から、何者にや、此方を指して來る聲音す。御佛に仕ふる此の寺のものの燈燭をつぎ參らせんこて來つるにや、こ打見るに、御堂の外は月の光白々として、霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へでや、頭には何やらん打被きたれど、正しく僧形したるが歩み寄るさまなり。心を留むるこにはあらざれど、何こしもなくなほ見てあるに、やがて月の及ばぬ闇の方に身を入れたれば、定かには知れぬながら、この御堂に打向かひて、一度は先づ拜み奉り、さて静々こ上り來りぬ。御堂は狭からぬに、燈は螢ほごなり。燈の高さは高し、互のほごは隔りたり。此方を彼方は有りとも知らず、

彼方を此方は能くも見得ねば、西行はたゞ我と同じき心の人も亦有りけるよと思ふのみにて打過ぎたり。彼方は固より闇の中に人有るこを知らざれば、何に心を置くべくもなく、御佛の前に進み出でつ。いとつゝましげに危坐りて、數多たび合掌禮拜なし、一心の誠を致すこ見ゆ。同じ菩提の道の友なり。其の心操の淺間ならぬも、夜深の參詣に測り得たり。衣の色さへ辨ち得ざれば、面はまして見るべくも無けれど、淨土の同行の人なるものを呼掛けて語らばや、名をも問はばや、西行は胸に思ひけるが、卒爾に物言はんは悪しかるべし。祈願の終つて後にこそこ、心を控へて伺ふに、彼方は數珠を取出して、さやく、こばかり擦りそめたり。針の落つる音も聞くべきまで、物靜かなる夜の御堂の眞中に在りて、水精の數珠を擦る音の亮かなる響、いと訝えて神々し。御經

は心に誦するごおほしく、萬籟絶えたるに珠の音のみをただ緩やかに響かす。その聲或は明かに、或は幽かに、或は高く、或は低く、寢覺の枕の半ばは夢に霰の音を聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面に、菡萏かんたんの急に開くを聞くが如く、小川の水の濁り咽ぶか、雨の紫竹の友擦れか、山吹にほふ山川の蛙鳴くか、過たれて、一聲聲中に萬法ありと、いごをかしくも聞きなざるれば、西行感に入つてありけるが、期したるほどの事は仕果ててや、其の人數珠を收めて、御佛をば禮拜すること數多たびしつ、やをら身を起して退らんごす。菩提の善友、淨土の同行、契を此の土に結ばんには、今こそ言葉を懸くべけれご、

菡萏

思ひ入りて擦る數珠の音の聲澄みておぼえずたま
る我がなみだかな

ご、西行俄に詠みかくれば、彼方は始めて人あるを知り、思ひがけぬに驚きしが、何ご仰せられしぞ、今一度「ご心をおし鎮めて問返す。聞取りかねけんご猜かするまご、思ひ入りて擦る數珠の音の聲澄みて。」ご復び言へば後は言はせず、君にておはせしよ。こはいかに。「ご涙に顫ふおろく、聲、言葉の文あもしごろもごろに、身を投伏して取附きたるは、聲音に紛ふかたもなき、其の昔偕老同穴の契も深かりし我が妻なり。女は胸逼りて、語らんごするに言葉を知らず、巖に依りたる幽蘭の、媚かねごも離れ難く、たご露けくぞ見えたりける。西行きつご心を張り、

「これは世を捨てたる瘦法師なり。捉へて何をか歎き給ふ。心を安らかにして語り給へ。昔は昔、今は今、繰言な露のたまひそ。何事も御佛に頼み給へ。心留むべき世にも侍らず。」

と諭せば、女は涙にて、

さては猶我を世に立交らひて月日を経るものと思し給ふや。君の保延に家を出で給ひしより、春の花、秋の月を眺むるに懶くて、片親なき兒の智慧敏きを見るにつけ、胸を痛め心を傷ましめしが、所詮は甲斐なき嗟歎せんより、今生は擱き後世をこそ助からめ、娘を九條の叔母に頼みて君の御跡を追ひまゐらせ、同じ御佛の道に入り、高野の麓の天野といふに日頃行ひ居り侍るなり。さても別れまゐらせし往時は、我が齡僅に二十を超えつるのみ。また幼兒を離せし時は、それが六つと申す愛度なき折なり。老いて夫を先立つるにも、泣きて泣き足る例は聞かず、物言はぬ嬰兒を失ひても心狂ふは母の情なり。その悲しさは如何ばかりと覺す。それをも堪へて、鬼女蛇神のやうに過ぎ來つるは、我が悲みをも

保延 崇徳天皇の御代。西
行の出家せしは同三（一
七九七）年。

悲しとせで、偏に君が歡喜を我が歡喜とすればなり。さるを繰言いふもののやうに思はせまゐらせたる拙さ情なさ。君は我が爲の知識となり給ひぬれば、恨み侍らざるばかりか、悦びこそ仕うまつれ。彼の世にてもあれ、遇ひまゐらせなば、よくぞ浮世を思ひ切りぬるこの御言葉をも得んこそ。日頃は思ひ設けられたれ、夢路にも似たる今宵の逢ふ瀬、幾年の心づかひも聊か本意ある心地して嬉しくこそ。と。
折柄、燈籠の香油は今や盡きに盡きて、やがて熄ゆべき一明り、ぼつと光を發すれば、臙氣ながら互に見る雜彩なき佛衣に裹まれて、蕭然として坐せる姿、修行に窶れ老いたる面ざし、有りし花やかさは影もなし。西行座を正しくして、
能くこそ思ひ切り給ひたれ。往時は世間の契を籠め、今は
出世間の交を結ぶ。菩提の善友、淨土の同行、さても悦ばしや。

但し浮世をば思ひ切りたる身の餘りに懷舊の涙の遣る瀬
無くては、先刻の様には言ひつるなり。慰められては、又
更に涙脆きは女のならひ、

御疑まことに其の理由あり。御聲を聞きまゐらするに齊
しく、胸に湛へに湛へし涙の、一時に迸り出でしがため、御疑
を得たりしなり。其の所以は他ならぬ。娘の上。聞き給へ、娘は
養ひ娘といふことにて、叔母の望むまゝに與へしが、叔母に
は眞の娘もあれど、萬づのこゝ我が娘の方勝りたれば、叔母
も日頃は孰れ優り劣りなく育てけるが、些かのこゝより叔
母の心いと頑兇になり、日にく、喧しう嘲み詈り、打擲き、密
かに調伏の法をさへ由無き人して行はせたる由なり。すで
に御佛の道に入り給ひたれば、我には今は子ならずと、君は
仰すべけれど、其の君が子はいと美しう才も賢く生まれつ

調伏の法 神佛に祈りて怨
敵病覺を降伏せしむる
法。

きたるに、道理無き呵責を受くる。惘然を、君は何ぞか見そな
はず。親無し子無しの桑門に入りたる上は是非なければども、
知つては魂魄も煎らるゝ思に、夜毎の夢も安からず。春は大
路の雨に狂ひ、小橋の陰に翻る彼の燕だに、兒を思うては、日
に百千度巢に出入りす。秋の霜夜の冷えまさりて、草野の荒
れゆくころといへば、彼の兎すら己が毛を咬みむしりて綿
として、風に當てじと子を愛しむ。それには異りて、我々の纒
に一人の子を持ちて、人となるまで育てもせず、兒童の間の
遊にも、片親なきは肩窄る。其の憂き思を四つよりさせ、六つ
といふには、繼しき親を頭に戴かせ、雲の蒸す夏、雪の散る冬、
暑さも寒さも問ひ尋ねず、山に花ある春の曙、月に興ある秋
の夜も、世にある人の姫等の笑み樂しむには似もつかず、あ
ぢきなう日を送らせぬる、それさへ既に情なく、親がひの無

きここなれば、同じ程なる年頃の他家の姫を見るにつけ、嗚呼我が子はと思ひ出でて、木の片竹の端くれと成り極めたる尼の身の、我が身の上は露思はねど、かゝる父を持ち、母を持ちたる我が子の果報の拙さを哀と思はぬことも無し。況して此の頃の噂を聞き、又餘處ながら視もすれば、父土おはさば、母あらば、親を慕ひて血を絞る涙に暮るゝ時もある體、親の心の迷はずてやは、御佛の道に入りたれば、名の上の縁は絶えたれど、血の聯續は絶えぬ間、親なり、子なり、脈絡は牽く。忘るゝ暇もあらばこそ。若し其の儘に擱いて、哀しき終を餘處々々しく見ねばならず。定まらば、佛に仕ふる自らは、禽にも獸にも羞づかしや。譬へば、來ん世には金の光を身より放つことも嬉しからじ。思へば、御佛に仕ふるは、本は身を助からんの心のみにて、子にも妻にもいと酷き鬼のやうな

ることなりけり。爽快には似たれども、己一人を蓮葉の清きに置かん其の爲に、人の憂目に目もやらず、人の辛きに耳も假さず、世を捨てたればと一口に、此の世の人のさまざまを、何ともならばなれかしと斥け捨つるは卑しきやうなり。何とて尼にはなりたりけん、如何にもして娘と共に經べかりしに、鈍くも自ら過ちけるよ。俗に還りて娘を叔母より取返さんと思ひしことも一度二度ならずありき。されど、流石に年來頼める御佛に離れまゐらせんことも後めたくて、心この争に何こなすべき道も知らず。幼きより頼みまゐらせたる此の地の御佛に七夜参りの祈願を籠めしも、娘の上の安かれと思ふ爲ばかり。恰も今宵満願の折から、圖らずも御目にかゝりて、胸には此の念ある上に、君が往時家を出で給ひし時の御光景まで、一時に胸に浮かび來て、文も分たず

涙の抑へ難かりしなり。と細々に語れば、西行も數多たび眼を押しぬぐひしが、聲を和らげて、いと靜かに、

「言ひ給ふところ皆其の理あり。但し娘は、此の五日ほど前、我自ら説き諭して、既に火宅の門を出でて法苑の内に入らしめ終んぬ。聊か聞くところありしかば、眼前の迤邐を縁として、身後の安樂を願はせん。ただ一度會ひて物言ひしに、親羞づかしき利根のものにて、兩親既に世を遁れ給ひぬ。己もこより女のここのなれば、世に榮えん願も深からず、睦ぶべき兄弟も無く、語らふべき朋友も持たず、心に殘ることも無し。たゞ養はれ侍りし恩恵に答へ參らすること無きは、聊か口惜しけれど、叔母君の現世安穩後生善處を日々に祈りて、酬い參らせん。全く世をば思ひ切り侍りぬ。とく導師となりて剃度せしめ給へ。」と雄々しくもいひ出でたれば、その心根

火宅 佛法にて、此の世の安樂ならざるを喻へていふ。
眼前の云々 現に行き難み居るを機會として。

の麗せきに愛でて、丈なす烏羽玉の髪を落して、色ある衣を脱棄てさせ、四弘誓願を唱へしめぬ。……や、何とし給へる。泣き給ふか。涙を流し給ふか。無理ならず、菩提の善友よ、泣き給ふか。嬉しさにこそ泣き給ふならめ。淨土の同行よ、落涙あるか。定めし感涙にこそおはすらめ。お、餘りの有り難さに、自分もまた涙聊か誘はれぬ。さて美しき姫は亡せ果てて、美しき尼君は生り出で給ひぬ。青々としたる寒げの頭、鼠色の法衣、小さき數珠、殊勝なること申すばかりなし。高野の別所に在る由の菩提の友を訪はんとて、飄然として立出で給ひぬ。その後のことは知る由もなし。燕の忙しく飛ぶ、兔の自ら剝ぐ、親は皆自ら苦しむ習なれば、子を思はざる人のあらんや。たゞ樂欲の満足を與へ、榮華の十分を享けしむるは、木の葉を與へて兒の啼くを賺かす、それにも増して愚かのことな

四弘誓願 佛又は菩薩の立つる弘大なる誓願。それに四種あるより四弘誓願といふ。

り世を捨つる人がまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ。たゞ幾重にも御佛を頼み給へ。心留むべき世にも侍らず、南無佛々々々。

こいひ切りて、口を結びて復言はず。月はやがて没るべく西に廻りて、御堂に射し入る其の光、水かさばかり冷やかに、端然として合掌せる二人の姿を、浮かぶが如くに御堂の闇の中に照らし出しぬ。(幸田露伴「二日物語」による)

ねがはくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月のころ

こゝを又わが住みうくてうかれなば松はひとりにならむとすらむ

こゝろなき身にもあはれは知られけり鳴たつさはの秋の夕暮 (西行法師「山家集」)

【参考資料】

幸田露伴 文學博士。慶應元(二五二五)年江戸に生まる。名は成行。かつて京都帝國大學教授たりき。
山家集 二卷。西行法師の歌集。異本多くして卷數も一定せず。参考書には、
釋固淨・梅澤和軒「山家集 詳解」
藤岡作太郎「異本山家集」
千勝義重「山家集評釋」
尾崎久彌「類從西行上人歌集新釋」

一一 方丈の記

一 ゆく川

ゆく川の流は絶えずして、しかも元の水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、且消え且結びて久しくこぼまることなし。世の中にある人こすみかこ、亦かくの如し。玉敷の都の中に、棟を竝べ囊を争へる、尊き卑しき人の住居は、代々を経て盡きせぬものなれど、これをまことかこ尋ぬれば昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處も變らず人も多かれど、古見し人は二三十人が中に僅に一人二人なり。朝に死し夕べに生まるゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、何方より來りて何方へか去る。又知らず、假

【参考資料】

方丈記 一卷。鴨長明の隨筆。参考書には、
加藤馨齋「方丈記酒説」
植島昭武「方丈記流水抄」
今泉定介「方丈記講義」
内海弘藏「方丈記評釋」
佐野保太郎「方丈記新釋」
吉川秀雄「方丈記精解」
玉井幸助「校本方丈記」

の宿り誰が爲に心を惱し、何によりてか目を悦ばしむる。その主人とすみかゝ無常を争ひ去るさま、いはば朝顔の露に異らず。或は露おちて花残り、残るといへども朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露なほ消えず、消えずといへども夕べを待つことなし。

二 日野山の奥

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿を造り、老いたる蠶の繭を営むが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだにも及ばず。さかくいふほどに齡は年々にかたぶき、住家は折々に狭し。その家のさま世の常ならず。廣さは僅に方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛金を

日野山 京都府宇治郡醍醐村。

かけたなり。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さむが爲なり。その改め造る時、幾ばくの煩かある。積むところ僅に二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらす。

いま日野山の奥に迹を隠して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、内には西の垣に沿へて阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に、普賢ならびに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小き棚を構へて黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌管絃往生要集ごさきの抄物を入れたり。傍に箏琵琶各一張を立つ。いはゆる折箏つぎ琵琶これなり。東にそへて蕨のほごろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。枕のかたに炭櫃あり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占

往生要集 六卷。源信僧都の著。淨土念佛に歸依すべきことを勧めたるもの。
折箏・つぎ琵琶 共に用ふる時に接合はせて彈するやうに出来たるなり。
蕨のほごろ 蕨の穂の長く延びたるもの。
つかなみ 藁を編みて作れ

めてあばらなる姫垣をかこひて園とすすなはちもろくの薬草を植ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。その處のさまをいはば、南に笥あり。岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木の葛迹を埋めり。谷繁けれど、西は晴れたり。観念のたより無きにもあらず。春は藤浪を見る。紫雲の如くして西の方にほふ。夏は時鳥を聴く。語らふごこに死出の山路を契る。秋は蜩の聲耳に満てり。空蟬の世を悲しむかき聞ゆ。冬は雪をあはれむ。積り消ゆるさま罪障に喩へつべし。

もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業修めつべし。必ず禁戒を守るごしもなければ、境界なければ何につけてか破らむも。

る敷物。

正木の葛



し迹のしら波に身を寄する且には、岡の屋に行きかふ船を眺めて満沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕べには、潯陽の江を思ひ遣りて源都督の流れをならふ。若し餘りの興ある時は、しばし松のひびきに秋風の樂をたぐへ。水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれど、人の耳を喜ばしめむごにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居るごころなり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。若しつれなる時は、これを友として遊びありく。彼は十六歳、我は六十。その齡ごこの外なれど、心を慰むるごこは、これ同じ。或はつばなを抜き、岩梨を採る。又ぬかごをもち、芹を摘む。或はすそわの田居にいたりて落穂を拾ひてほぐみを作る。若し日う

迹のしら波に 世の中を何

にしたさへむあさばらけこ

ぎ行く舟のあごの白浪

(沙彌滿誓)

岡の屋 京都府紀伊郡 宇

治川の東岸。

滿沙彌 滿誓沙彌。右大辨

笠麻呂。養老五年出家。

潯陽の江 潯陽江頭夜送

客、楓葉荻花秋瑟々。(白

樂天)

源都督 桂大納言源經信。

琵琶の名手。承徳元(一七

五七)年歿す。年八十二。

秋風・流泉 ともに琵琶の

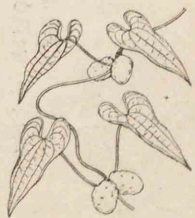
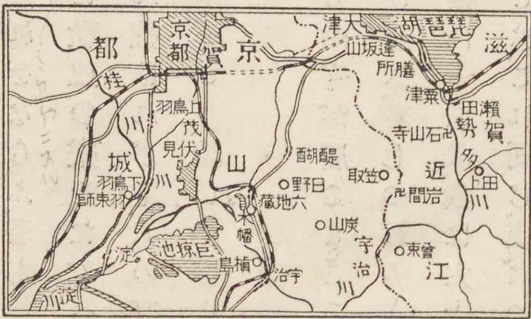
曲名。

つばな 芽の花。

岩梨



ら、かなれば嶺に攀ぢのぼりて、遙かに故郷の空をのぞみ、
 木幡山・伏見の里・鳥羽・羽束師を見る。勝地は主なければ、心を
 慰むるにさはりなし。歩みわづらひな
 く、志遠くいたる時は、これより嶺つゞ
 き、炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にま
 うで、石山を拜む。もしは又粟津の原を
 分けて蟬丸の翁が迹をさぶらひ、田上
 川を渡りて猿丸大夫が墓をたづね、歸
 るさには、をりにつけつゝ、櫻を狩り、紅
 葉をもこめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、
 かつは佛に奉り、かつは家苞にす。もし
 夜靜かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほ
 す。草むらの螢は遠く槇の島のかざり、火にまがひ、曉の雨は



岩間 滋賀縣滋賀郡石山村
 の正法寺の觀音。
 石山 同郡石山寺の觀音。

おのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ／＼と鳴く
 を聞きて、父か母かどうたがひ、峯のかせぎの近く馴れた
 るにつけても、世に遠ざかるほごを知る。或は埋火を掻きお
 こして、老の寢覺の友さす。恐ろしき山ならねど、梟の聲をあ
 はれむにつけても、山中の景色をりにつけて盡くることな
 し。況や深く思ひ、深く知れらむ人のためには、これにしも限
 るべからず。

おほかたこの處に住みそめし時は、あからさまと思ひし
 かご、今すでに五こせを経たり。假の庵もや、古屋となりて、
 軒には朽葉深く、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに
 都を聞けば、この山に籠り居て後、やむごとなき人のかくれ
 給へるもあまたきこゆ。まして數ならぬたぐひ、盡くしてこ
 れを知るべからず。度々の炎上に亡びたる家、又いくそばく

山鳥の云々 山鳥のほろほ
 ろさなく聲きけば父かこ
 そ思ふ母かこ思ふ(僧
 行基)
 峯のかせぎ 山ふかみなる
 るかせぎのけじかきに世
 に遠ざかるほごぞ知る
 る(西行法師)
 埋火云々 いふこともなき
 埋火をおこすかな冬のれ
 ざめの友しなれば(堀
 河百首)
 恐ろしき山 山深みけちか
 き鳥の音はせて物おそろ
 しきふくろふの聲(西行
 法師)

ぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。(鴨長明「方丈記」)

八月八日の事なり。大將参りて大床に候はれけり。大宮は琵琶を弾きさして、撥にて「それへ」と仰せけり。其の御有様あたりを拂ひて見え給ふ。互に昔今の御物語あり。大將は福原の都の住み憂きこと語り申して泣かれければ、宮は平安京の荒れゆくことを仰せて、共に御涙に咽ばせ給ひけり。かくて夜もいたく更けければ、大宮は御琵琶を搔寄せさせ給ひて、秋風樂を弾かせ給ふ。侍従は琴を弾きけり。大將は腰より笛を取出し、平調に音取りつゝ、遙かにこれを吹き給ふ。その後故郷の荒れゆく悲しさを今様に作りて歌ひ給ふ。

古き都を来て見れば 浅茅が原とぞ成りにける

月の光はくまなくて あき風のみぞ身にはしむ

と三遍歌ひ給ひければ、宮を始め奉り、御所中に候ひける女房達、折からあはれに覺えて、皆袂をぞ絞りける。(源平盛衰記による)

【参考資料】

源平盛衰記 四十八卷。作者不詳。参考書には、今井弘濟・内藤貞顯「参考源平盛衰記」

八月八日 治承四(一一八四〇)年。

大將 後徳大寺左大將實定。

大宮 近衛天皇の皇后多子。實定の妹。

福原 神戸市の中。

侍従 待宵の小侍従さいふ。

近衛天皇の皇后多子に仕ふ。石清水八幡別當紀光清の女。

今様 平安朝の後期より鎌倉時代にかけて流行せる謡物の一種。神樂・催馬樂・風俗歌などの舊調に對して、當世風の歌の意にて今様歌といふ。七五調の句四つより成るを普通とす。

御所 鴨川の西岸、近衛通の東にあり。

一二 反省の記録

萬葉集と古今和歌集との比較によつて、平安朝の初には、興味を中心が刹那より連續へ、個體的より典型的へ移りつゝあつたことを感ずると同時に、反省する心が目ざめて、實感の率直な告白より想像力による構成的表現の力を得つたことが察せられる。當時の人々が日記をつけたことは、彼等が始めて反省的になり、自我を連續の相のみに見出さんとしたが爲であらう。日記は現存せるもの他にもあつたことは、紫式部日記及びその他の日記を綜合して作つたらしい榮華物語によつても推察される。また光源氏が須磨に於て繪日記をつけ、紫の上もわが御有様を日記のやうに書き給へり。などある句からも、日記をつけることが、

【参考資料】

紫式部日記 二卷。紫式部が上東門院に宮仕せし時の日記なり。参考書には、清水宣昭「紫式部日記」

三木五百枝「紫式部日記講義」

關根正直「紫式部日記精解」

蜻蛉日記 八卷。右大將道綱の母の作。天曆八年より天延六年まで二十一年間に於ける、作者の身邊に起れることを年月のもとに記せり、参考書には、

僧契沖「蜻蛉日記考證」

坂微仲「蜻蛉日記解環」

更級日記 一卷。菅原孝標の女の作。紀行を主とす。参考書には、

教養あり、徒然わぶる當時の人々の常であつたやうに想像される。かゝる日記は、多くは三人稱で書かれ、表現も回顧的であつた。蜻蛉・更級・和泉式部日記等は和歌が中心であつて、他の部分は後に歌が作られた事情を想ひ出して叙述したと考へらるゝ節が多い。蜻蛉日記の後半は短篇小説に近づいてゐる。伊勢物語は在五中將日記と稱せられ、和泉式部日記は和泉式部物語とも稱せられた。されば、平安朝の日記文學は抒情詩と物語との中間に位するものである。自己の生活を反省し、その抒情的に高潮した刹那々々を聯結して表現し、連續の相のもとに人生を觀照する態度は、更に自由に想像力を活かして人生を描かんとする態度に進みゆくのが自然である。

物語は汝と我との關係の推移を内容とする。記・紀は外な

關根正直 「更科日記略解」
 大塚彦太郎 「更科日記講義」
 玉井幸助 「更級日記錯簡考」
 同 「更科日記新註」
 和泉式部日記 一卷。長保五年四月より翌寛弘元年正月までの日記。參考書には、
 與謝野晶子 「新釋和泉式部日記」

徒然草 一卷。兼好法師の隨筆。參考書の主なるものは、
 林 道春 「徒然草野槌」
 北村季吟 「徒然草文段抄」

淺香久敬 「徒然草諸抄大成」
 内海弘藏 「徒然草詳解」
 塚本哲三 「徒然草解釋」

榮花物語 五五頁參照。
 紫の上 光源氏の妻。
 抒情詩 自然又は人事に對

る世界の歴史であり、萬葉集は内なる世界の刹那の告白であり、物語は心の世界の歴史である。平安朝の女詩人は、かの年代史的な外面的歴史を輕んじ、心情の歴史を重んじたことは、源氏物語や更級日記の文によつても想像される。しかし紫式部の考へた心の世界の價值は餘りに主觀的であつて、未だ超主觀的なものを知らなかつた。そこには心情の推移が興味を中心になつてゐる。而してその心情の必然的展開といふことは未だ自覺に上つてゐなかつた。奈良朝以後の人々は狭い主觀の世界に閉籠り、平安朝の貴族は權勢や官位を得んとする運動と、歌舞遊樂の生活以外に爲すことなく、殊に上流の婦人は「御衣がち」に几帳の後に坐し、世間的な經驗を殆ど持たなかつたのである。精神の成長は、主觀と超主觀的なものとの親密な交渉が保たれ、絶えず後

して、作者の感想・氣分を叙へたる詩。
 記・紀 古事記・日本書紀。

源氏物語云々 螢の卷に、「物語は」神代よりあることを記し置きけるなり。日本紀などは唯かたぞぞかし。これ等(物語)にこそ道々しく委しきことはあらめ。その人ひいづることこそなけれ、善きも惡しきも世に經る人の有様の、見るにも飽かず聞くにもあまることを、後の世にも傳へさせまほしき節々を、心に籠め難くて、言ひ置き始めたるなり。善きさまに言ふことは善きことのかぎりをえり出で、人に隨はむことは、又あしきさまの珍らしきことを取りあつめたる、皆かたが

者が内化されることによつて可能になる。主觀に閉籠つた人々は道徳的意識も臃げであり、未だ成長する個性ではなかつた。展開なき連續は弛緩、倦怠、分裂に終る。連續的な姿にせんごすれば却つて不徹底な、なまぬるい表現になることを感じた人々は、刹那の潑刺たる印象をそのままに書きつけた。それは枕草子、徒然草の如き隨筆文學である。

萬葉集と徒然草とを比較するに、前者には素樸な純一さがあり、後者には複雑を通過した簡潔さがある。前者は刹那に生きた人々の表現であり、後者は連續の世界を分裂した刹那に集中した人の表現である。和歌に於ても、古今和歌集以後の典型的趣味を超えて、再び印象的な、叙景的な表現に赴いた新古今和歌集の新鮮味は、同一の傾向から生まれたものであらう。

たにつけて、この世の外
の事ならずかし」
更級日記云々 更級日記
に「源氏を一の卷よりし
て人も交らず几帳のうち
にうち臥してひきいでつ
つ見る心地、後の位も何
かはせむ。晝は日ぐらし、
夜は目のさめたる限り、
火を近くともしてこれを
見るより外のことしなけ
れば、自ら名などはそら
に覚え浮かぶをいみじき
ここに思ひ云々」
御衣がち、こまぐ、こく衣
服を着飾りて、そのため
に容姿は隠されて、只衣
服のみ見ゆる様にいふ。
枕草子 三三頁參照。

新古今和歌集 一四七頁參照。

奈良朝の歌人は純樸であつたが、平安朝の文學者は感傷的になつた。平安朝の優秀な作家は、皆、縣の少き國守か、その子女であつて、地方の素樸な生活に接觸し、それと堂上貴族の浮華な生活を對照して眺め得る位置にあつた。彼等は地方人の蒙昧のうちにある時は都に憧れたであらうが、宮仕をするに及んでは、外面の光彩に心酔することなく、絶えず反省を促されたであらう。藤原氏に私有された文明は、制限された、極めて狭苦しいものであつて、貴族生活を讚美することなくしては、その中に迎へ入れらるゝことなく、一言の非難もその圏外に放逐されたであらう。されば彼等の言葉は婉曲をきはめ、思ふことを臃にうちかすめ、人生の批評を言葉の奥深く秘めなければならなかつた。彼等は主觀的でありながら主觀を直截に表現し得なかつた。かくて文章

のリズムは低く、細やかな調子となり、その表現は不徹底になつた。源氏物語に表現された世界は、永遠の黄昏の沈滞した空氣が垂籠め、描かれた人々は優柔不斷である。平安朝の文明は裝飾の要素が多く、外面の華美によつて内部の貧弱を補はうとしてゐた。貴族等は只享樂の日の永遠に連續せんことを希ふのみで、展開は恐ろしいことであつたらう。當時の佛教は、國々に國分寺を建てた奈良朝の、人道的熱誠もなく、個人の壽福を祈る加持祈禱教となり、寺院・法會・僧侶・讀經等、皆貴族の官能を喜ばすやうに裝飾化された。疫病ものへの怖に悩み、享樂の生活によつて無氣力にされた當時の人生には、奈良朝の晴朗は影も留めてゐない。當時の秀でた人々には、この不徹底さを逃れんとする希望が早くから動いてゐた。貫之は諧謔と典型美によつて悲哀を忘れよ

リズム 調子。Rhythm.

うとしてゐるが、蜻蛉日記の著者は當時の婦人の苦悶をかなり深刻に表現した。和泉式部は宮仕の浮沈多き生活と僧庵の靜かな生活との對照を夢のやうに感じた。紫式部は美的生活に對する興味と冥想の傾向を有し、始は前の傾向に従つて現實と理想とを調和しようとしたが、晩年には後の傾向に従つたやうである。主觀に生きることは、その奥に超主觀的なものを見出すのでなければ、唯自己の世界を狭めるのみである。更級日記の著者は、物語と幻想とのうちに生き、夢と現實との區別もなかつた。夢が賣買されたのはこの時代のことである。藤原氏の榮華が衰微し始めた時、その黄金時代の追懷に現實を忘れようとしたことが、榮華物語などの書かれた動機であらう。しかし沈滞は息苦しいほどになり、彌縫と虚飾によつて内部の糜爛を隠して來た文

夢が云々 玉葉和歌集・宇治拾遺物語・曾我物語などに、その事實を記せり。

明は、全く行きつまつて潰滅した。こゝに人生をはかなみ、これに執着するを迷妄とし、享樂を罪惡とする厭世觀が盛んになつたのは自然である。西行や長明はこの思潮の代表者といふべきである。

平安朝の「つれづれ」といふ語は、世紀末のアンヌイといふ語を聯想せしめる。紫式部はその作品を中宮に奉る際に、「されど徒然におはしますらむ。またつれづれの心を御覽ぜよ。」と書いてゐる。これは紫式部日記が書かれた動機を語つてゐる句であらう。源氏物語を讀んでも、遊樂がつれづれを慰める爲に行はれたことが多かつたのを感じる。つれづれこそは展開なき沈滞の惱み、充實した人生を見出し得ざる悶えではあるまいか。兼好が「つれづれなるまゝに日ぐらし硯に向かひて、心に移り行くよしなしごきをそこはかこなく書

アンヌイ 倦怠。Ennui.

中宮 上東門院を指す。

されど徒然云々 紫式部日記に出づ。

附くれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。」と書いたのは、充實した生活、展開する思惟に入ることが出来ぬ。この途を見出さぬが爲には分裂した刹那の斷想をそのまゝに誌して、我が姿を如實に眺めなければならぬ。然るに何と云ふ混亂した姿であらう。そして統一に赴くべき途も見出し得ない故に物狂ほしさを感じる。「こいふ如き意味ではなからうか。西行や長明は社會と人生とに背き、自然の愛、彼岸の宗教に逃れようとした人であるが、兼好はこの對立の一半を捨てて、他の半面に生きるには餘りに複雑な心の所有者であつた。彼の心中には平安朝の美的趣味と鎌倉・室町時代の厭世觀とが争つてゐた。彼にとつて、つれづれわぶる心は靜寂主義に赴かんとする心である。彼は、佛に仕う奉ることつれづれもなく、心の濁も清まるこゝちすれ。」というて、社會生活を離れ

ようとしてゐる。しかし一方には來世の信仰に生きるこの出來ぬ現實を尊重する心をもつてゐた。彼は非常に官能的であり、平安朝の教養を重んじ、有識者ぶり、古き世を戀ひ、家居の趣味等に風雅の心を述べるかと思ふと、やがて清貧を崇拜し、名利を求むる心を卑しんでゐる。彼は元來、享樂主義の傾向を有してゐた。そして彼が死を直視し、人生の無常を痛感したことは、却つて生の價値の切實に感じ、自己を知り、自己に忠實になり、自己に集中しようとしたかゝる複雑な精神内容を統一することは、當時に於ては不可能であつた。彼は未完成の精神を尙び、無差別論者であつて、彼の著作は一貫した主張のない、結論のない批評となつた。そこには現實から理想を見る皮肉、理想から現實を見る諷刺、理想が理想を笑ふ自嘲がある。徒然草は國文學中稀に見る緊縮し

た文章であつて、辨證論的な考へ方の眞摯さがある。これを消閑の戲筆と見ることは不可能である。

(土居光知「文學序説」による)

つれづれわぶる人は、いかなる心ならむ。まぎるゝ方なく、ただ一人あるのみこそよけれ。世に従へば、心、外の塵にうばはれて、感ひやすく、人に交はれば、ことばよその聞きにしたがひて、さながら心にあらず。人にたはぶれ、ものに争ひ、一たびは恨み、一たびは喜ぶ。その事、定まれることなし。分別みだりに起りて、得失やむ時なし。まどひの上に酔へり。酔の中に夢をなす。走りていそがはしく、ほれて忘れたること、人みなかくの如し。未だまことの道を知らずとも、縁をはなれて身を靜かにし、事にあづからずして、心をやすくせむこそ、しばらく樂しぶともいひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸縁をやめよとこそ、摩訶止觀にも侍れ。(「徒然草」)

辨證論的 Dialectic の譯。直觀・經驗によらず、概念を分析して事の理を研究すること。

土居光知 英文學者。高知縣の人。東京帝國大學英文科の出身。東北帝國大學教授。

一三 大原御幸

文治元年九月なつつきの末に、女院はかの寂光院へ入らせおはします。道すがら、四方の梢の色々なるを御覽じ過ぎさせ給ふほごに、山陰なればにや、日もやうく暮れかゝりぬ。野寺の鐘の入相の聲すごく、わくる草葉の露しげみ、いごゝ御袖濡れまさり、嵐烈しく、木の葉みだりがはし。空かき曇り、いつしかうちしぐれつゝ、鹿の音幽かにおこづれて、蟲の恨もたえくゝなり。ごにかくに取りあつめたる御心細さ、たごへ遣るべき方もなし。浦傳ひ、島傳ひせしかごも、流石かくはなかりしものをと思しめすこそ悲しけれ。岩に苔蒸して寂びたる所なれば、住ままほしくぞ思しめす。露結ぶ庭の荻原霜枯れて、籬の菊の枯れくゝに、うつろふ色を御覽じても、御身の

【参考資料】

平家物語 十二卷。異本多し。作者不詳。平氏の勃興より滅亡までを記せり。参考書には、

作者不詳 「平家物語抄」

平 道樹 「平家物語標註」

赤堀又次郎 「平家物語通釋」

今泉定介 「平家物語講義」

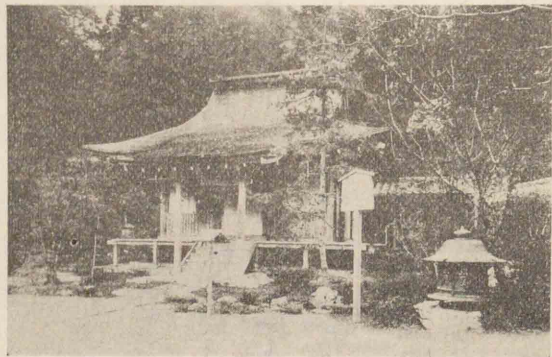
内海弘藏 「平家物語評釋」

御橋惠言 「平家物語略解」

文治元年 壽永四（一八四五）年三月二十四日平氏亡ぶ。八月十四日改元して文治といふ。

女院 建禮門院。清盛の女、徳子。高倉天皇の中宮、安徳天皇の御母。建保元（一八七三）年薨す。年五十七。

上ごや思しけむ、佛の御前に参らせ給ひて、天子聖靈、成等正覺、一門亡魂、頓證菩提。」と祈り申させ給ひけり。いつの世にも



忘れ難きは、先帝の御面影、ひしご御身に添ひて、如何ならむ世にも忘るべしごも思しめさず。

さて、寂光院の傍に、方丈なる御庵光室を結びて、一間をば佛所に定め、一間をば御寢所にしつらひ、晝夜朝夕の御勤、長時不斷の御念佛懈る事なくして、月日を送らせ給ひけり。かくて神無月、中の五日の暮方に、庭に散りしく檜の葉を、もの踏鳴らして聞えければ、女院、世を厭ふ處に、何者の訪ひくるやらむ。あれ見よや。忍ぶべきものなら

寂光院 京都府愛宕郡大原村にあり。京都の北四里。天子聖靈 安徳天皇の亡靈を指す。
成等正覺 妙等の佛果を成就する意。
頓證菩提 機會に遭遇して、頓に心の闇を去り、佛果を證得すること。
先帝 安徳天皇。

ば、急ぎ忍ばむ。こて見せらるゝに、小鹿の通るにてぞ有りける。女院、さていかにやいかに。こ仰せければ、大納言の佐の局、涙を抑へて、

岩根踏み誰かは訪はむ、檜の葉のそよぐは鹿のわたるなりけり

女院、この歌餘りにあはれに思しめして、窓の小障子に遊ばし留めさせおはしますかゝる御つれづれの中にも思しめしなぞらふ事どもは、つらき中にも數多あり。軒に竝べる植木をば、七重寶樹をかたごり、岩間に積る水をば、八功德水と思しめす。無常は春の花、風に從つて散り易く、有涯は秋の月、雲に伴なつて隠れ易し。承陽殿に花を翫びし旦には、風來つて薫を散じ、長秋宮に月を詠ぜし夕べには、雲覆ひて光を隠す。昔は玉樓金殿に錦の茵を敷き、妙なりし御住居なりし

大納言の佐の局 平重衡の室。

七重寶樹 極樂には、金樹・銀樹・琉璃樹・玻瓈樹・珊瑚樹・瑪瑙樹・砮磤樹の七樹が七重に並列せり。八功德水 淨土にありといふ、八つの功德を具有せる池水。承明殿・長秋宮 共に宮殿の名。後宮。

かごも、今は柴引結ぶ草の庵、よその袂もしをれけり。

かゝりしほごに、法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居、御覽ぜまほしう思しめされけれども、二月・三月のほどは、嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峰の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解けず。かくて春過ぎ夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇、夜をこめて大原の奥へ御幸なる。忍の御幸なりけれども、供奉の人々には、徳大寺・花山院・土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通の御幸なりければ、かの清原深養父が補陀樂寺、小野皇太后宮の舊跡、觀覽あつて、それより御輿にぞ召されける。遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日餘りの事なれば、夏草の茂みが末を別入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じ馴れたる

法皇 後白河天皇。

北祭 賀茂別雷神社の祭。四月中の酉の日。

徳大寺 左大將實定。花山院 大納言兼雅。土御門 權中納言源通親。

清原深養父 平安朝初期の歌人。補陀樂寺 京都府愛宕郡大原にありきと傳ふ。小野皇太后宮 藤原歡子。關白教通の女。後冷泉天皇の皇后。

方もなく、人跡絶えたるほごも思しめし知られて哀なり。
 西の山の麓に、一字の御堂あり。即ち寂光院これなり。舊う
 造りなせる泉水、木立よしある様の處なり。藁破れては霧不
 斷の香を焚き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ。こは、かやうの
 處をや申すべき庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の
 浮草波にたゞよひ、錦を晒すかこあやまたる。中島の松にか
 かれる藤波の、うらむらさきに咲ける色、青葉まじりの遅櫻、
 はつ花よりも珍らしく、岸の山吹咲きみだれ、八重立つ雲の
 絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を持ち顔なり。法皇、これ
 を叡覽あつて、かうぞ遊ばされける。

池水に汀のさくら散りしきて波の花こそさかりな
 りけれ

舊りにける巖のたえまより、落ちくる水の音さへ、故び、由あ

青葉まじりの云々 夏山の
 青葉まじりの遅櫻初花よ
 りも珍らしきかな (藤原
 盛房)

る處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも、筆も及び難し。

さて、女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦、薺あさがは這ひかゝり、
 葱まじりのわすれ草、瓢箪ひょうたんしばく、空し、草、顔淵が巷に滋く、
 藜藿深く鎖せり、雨、原憲が樞とほそを濕す。こも謂ひつべし。杉の茸
 目もまばらにて、時雨も、霜も、置く露も、洩る月影に争ひて、溜
 るべし。こも見えざりけり。後は山前は野邊、いさゝ小笹に風
 さわぎ、世に立たぬ身の習ひて、憂きふししげき竹柱、都の方
 の言傳は、間遠にゆへるませ垣や、僅に言問ふものにては、峯
 に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これらが音づねなら
 では、正木のかづら、青つゞら、くる人まれなる處なり。

法皇、人やある、人やある。こ召されけれども、御いらへ申す
 もものなし。やゝあつて、老い衰へたる尼一人参りたり。女院
 はいづくへ御幸なりぬるぞ。こ仰せければ、この上の山へ花

瓢箪 瓢箪展空、草滋、顔淵
 之巷、藜藿深鎖、雨濕、原
 憲之樞。(和漢朗詠集)
 原憲 字は子思。孔子の門
 人。孔子の歿後、草澤の間
 に隠る。

つみにいらせ給ひて候。と申す。さこそ世を厭ふ御習ごはい
ひながら、さやうの事に仕へ奉る人もなきにや。御痛はしう
こそ。と仰せければ、この尼申しけるは、五戒・十善の御果報盡
きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。
捨身の行に、なじかは御身を惜しませ給ひ候べき。因果經に
は、欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、見其現在因。と説かれ
たり。過去・未來の因果を、かねて悟らせ給ひなば、つやく御
歎あるべからず。昔、悉達太子は、十九にて伽耶城を出でて、檀
特山の麓にて、木の葉をつらねて肌をかくし、峯に上つて薪
を採り、谷に下りて水を掬ひ、難行苦行の功によつてこそ、遂
に成等正覺し給ひき。とぞ申しける。

この尼の有様を御覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬ
ものを結び聚めてぞ着たりける。あの有様にても、かやうの

五戒 偷盜戒・邪淫戒・妄
語戒・殺生戒・飲酒戒。
十善 不殺生・不偷盜・不
邪淫・不妄語・不綺語・不
惡口・不兩舌・不貪欲・
不瞋恚・不邪見。
因果經 四卷。劉宋の求那
跋陀羅の譯。因果應報の
例を擧げて教訓せるも
の。

伽耶城・檀特山 共に摩揭
陀國にありといふ。

事を申す不思議さよと思しめして、そもく、汝は如何なる
者ぞ。と仰せければ、この尼さめく、と泣いて、しばしは御返
事にも及ばずや、あつて涙をおさへて、申すにつけて憚お
ぼえ候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申す者
にて候なり。母は紀伊の二位、さしも御いとほしみ深うこそ
候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほ
ご思ひ知られて、今更せむかたなうこそ候へ。とて、袖を顔に
おし當てて、忍びあへぬ様、目も當てられず。法皇、げにも、汝は
阿波の内侍にてあるござんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞか
し。何事につけても、唯夢ごのみこそ思しめせ。とて、御涙せき
あへさせ給はねば、供奉の公卿・殿上人も、不思議の事申す尼
かなと思ひたれば、ごさはりにて申しけりこそ、おのゝ感
じあはれける。

信西 藤原通憲。鳥羽天皇
以下四朝に歴任す。平治
の亂に源義朝に殺さる。
紀伊の二位 信西の妻朝
子。沓衛天皇の御乳母。

さて、彼方此方を叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れか
かりつゝ、外面の小田の水越えて、鳴立つひまも見えわかず。
さて、女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引開けて叡
覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、
五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並
びに先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれた
り。蘭麝の匂に引替へて、香の烟ぞ立ちのぼる。かの淨名居士
の方丈の室の内に、三萬二千の床を並べ、十方の諸佛を請じ
給ひけむも、かくやこそ覺えける。障子には、諸經の要文ども、
色紙に書いて處々におされたり。その中に、大江定基法師が
清涼山にして詠じたりけむ、笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上、聖衆
來迎す落日の前。こも書かれたり。少し引きのけて、女院の御
歌とおぼしくて、

三尊 彌陀・觀音・勢至。
中尊 彌陀。
普賢 德利周遍仁慈惠悟の
菩薩の名。
善導和尚 唐の高僧。淨土
の教義を鼓吹す。
八軸 法華經、八卷。
九帖 善導和尚の觀無量壽
經の疏、九帖。
淨名居士 維摩詰。釋尊在
世時の人。

大江定基法師 法名寂昭。
圓通大師と號す。長保六
（一六六四）年入宋して彼
の地に寂す。
清涼山 支那山西省の靈
山。

おもひきや深山の奥にすまひして雲井の月をよそ
に見むこは

さてかたはらを叡覽あるに、御寢所を思しくて、竹の御竿
に、麻の御衣、紙の衾などかけられたり。さしも本朝漢土の妙
なる類、數をつくしし綾羅錦繡の粧ひも、さながら夢にぞな
りにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、ま
のあたり見奉りし事ども、今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞ら
れける。

やゝあつて、上の山より、濃き墨染の衣著たりける尼二人、
岩のかけ路を傳ひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇、あ
れは如何なるものぞ。と仰せければ、老尼涙を抑へて、花筐臂
にかけ、岩躑躅こり具して持たせ給ひて候は、女院にて渡ら
せ給ひ候。爪木に薇折りそへて持ちたるは、鳥飼中納言伊實

鳥飼中納言伊實 藤原伊通
の子。

が女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言典侍すけの局まと申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、皆袖をぞ濡らされける。

女院は、世を厭ふ御習おぼといひながら、今かゝる有様を見え参らせむずらむ恥づかしさよ。消えも失せばやと思しめせごもかひぞなき。宵々ごこの鬨伽の水、掬ぶ袂たもともしをるゝに、暁おきの袖の上、山路の露もしげくして、絞しぼりやかねさせ給ひけむ、山へも歸らせ給はず、また御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましく、たる處に、内侍の局参りつ、花筐はなかごをば賜はりけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候べきはやく、御見参あつて還御なしまゐらせ候へ。」と申されければ、女院御涙を抑へて、御庵室に入らせおはします。二念の窓の前には、攝取の光明

五條の大納言國綱 又土御門と號す。大納言の典侍の局 平重衡の妻。

を期し、十念の柴の樞には、聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思のほかの御幸かな。とて、御見参ありけり。〔平家物語〕

古より亂離の世には反覆の人あるを免れず。安きを求め、危きを避くるは已み難き人の情なればなり。然るに平家の一門、上は大臣納言より下は衛府諸司に至るまで、没落の運命を同じうせるは、何物の美かよく之に類ふべき。それ源氏の如きは、四海僅に一に歸せば、兄弟の争ひ直ちに始り、一族の連枝時ときに路傍の人にも劣れり。權勢幾くもなく、家臣の手に落ち、宗廟早く祀を絶てども、一人の義に殉ひ恩に死する者なし。盛衰興亡はこれ人事の常、寧ろ深く喜憂するに足らざらん。唯その運命に當る人、心優しく情麗しからば、何の幸かよく之に加ふべき。あゝ吾をして時を同じうせしめんか、願はくば源氏となりて興らんよりは、寧ろ平家となりて亡びなん。

〔高山樗牛「樗牛全集」による〕

一四 待賢門の戰

さるほごに、六波羅の皇居には公卿僉議ありて清盛を召されけり。紺の直垂に黒絲緘の腹巻に、左右の籠手を差して、折烏帽子引立てて大床に畏る。頭の中將實國を以て仰せ下されけるは、王事監きことなければ、逆臣滅びむこと疑なし。但し適、新造の内裏なり。若し回祿あらば朝家の御大事たるべし。官軍僞りて引退かば、凶徒定めて進み出でむか。然らば官軍を入れかへて、内裏を守護せさせ、火災なきやうに思慮あるべし。と仰せ下されければ、清盛畏りて、朝敵たる上は、逆徒の誅戮は掌の中に候間、時刻を廻らすべからず。然れば定めて狼藉出來せむか。火失なからむ條こそ難儀の勅詔にて候へ。さりながら范蠡が吳國を覆し、張良が項羽を亡ししも、

【參考資料】
平治物語 三卷。作者不詳。平治の亂の顛末を記せり。參考書には、

今井弘濟・内藤貞顯「參考平治物語」

内藤耻叟・平井賴吉「參考平治物語註釋」

今泉定介「平治物語識義」

待賢門 大内裏十二門の一。中御門ともいふ。長さ五間、瓦屋圓楹。今の上京區下立賣通大宮下の菱屋に在りき。

六波羅 平家の邸あり。この時二條天皇ここにいます。

左右の籠手云々 籠手は腕を被ふ武具なり。鎧を着たる時には多く左ばかりに籠手をさせども、腹巻には左右ともにさすこともさ、ぬこともあり。

皆これ智謀の致す處なれば、涯分武略を廻らして、禁闕無爲なるやうに成敗仕るべし。と奏して出でられけり。

主上御座あれば、皇居の御固めに清盛をば留めらる。大内へ向かふ人々には、大將軍は左衛門佐重盛、三河守頼盛、淡路守教盛、侍には筑後守家貞、子息左衛門尉貞能、主馬判官盛國、子息右衛門尉盛俊、與三左衛門尉景安、進藤左衛門家泰、難波次郎經房、瀬尾太郎兼安、伊藤武者景綱、館太郎貞泰、同じき十郎貞景を始として、都合その勢三千餘騎、六波羅を打出でて、賀茂川を馳せわたし、西河原に控へたり。

左衛門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、櫛句の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締めて、小烏といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、重藤の弓持ちて、黃桃花毛なる馬に、柳櫻摺つたる具鞍置かせて乗り

折烏帽子云々 兜の下に折烏帽子をかぶりたるが、御前に出づるまで兜を脱ぎて、烏帽子のひしげたるを引立て直したるなり。

頭の中將 藏人頭にて近衛の中將を兼ねたるもの。實國 源賴國の三男。王事監きこと云々 詩經の唐風に、「王事靡盬，不能蓺黍稷。」

回祿 火災。范蠡 越王勾踐を助け、吳を滅して天下に霸たらしめたる謀臣。

張良 字は子房、漢の高祖の謀臣。

今日の軍 平治元（一一八一）年十二月二十七日。

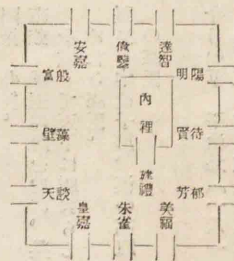
小烏 平家重代の名刀。

給へり。重盛宣ひけるは、年號は平治なり、華洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げむこそ何の疑かあるべき。誰かこゝに樊噲、張良が勇をなさざらむ。さて、三千餘騎を三手に分つて、近衛中御門、大炊御門、大宮表へ打出でて、陽明待賢、郁芳門へ押寄せたり。

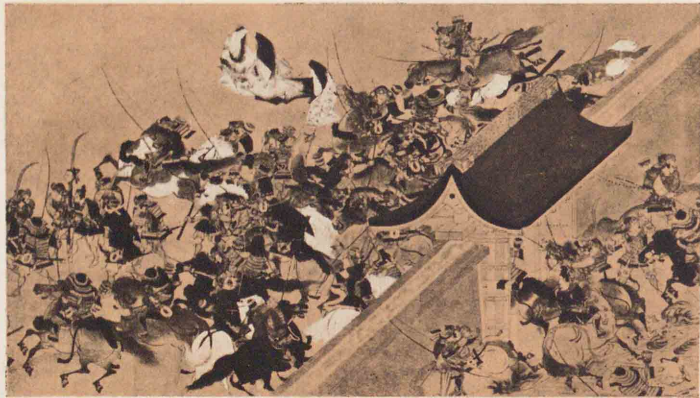
大内には、三方の門をさし固め、表をば開かれたり。承明、建禮の脇の小門をも共に開きて、大庭には馬ごも多く引立てたり。梅壺、桐壺、紫宸殿の前後まで、兵ひしと竝みゐたり。皆源氏の勢なれば、白旗二十餘旒打立てたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘旒さし揚げて、勇み進める。三千餘騎、一度に鬨をどつと作りければ、大内も響き渡りて夥し。

鬨の聲に驚きて、只今までゆゝしく見えられつる信賴卿、顔色變りて草葉の如くにて、南階を下られけるが、膝顫いて

樊噲 漢の高祖の勇將。



信賴卿 藤原信賴。時に正三位中納言たり。捕へられて六條河原に斬らる。年二十八。



(筆恩惠吉住) 卷繪物語平治

おりかねたり。人なみくゝに馬に乗らむと引寄せさせたれ
ども、太り責めたる大の男の、大鎧は着たり、馬は大きなり、乗
煩ふ上、主の心には似も似ず、逸り切つたる逸物なれば、つこ
出でむ、つこ出でむとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へ
たり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかく
やと覺ゆるばかりにて、乗りかね給ふ處を、侍二人つこ寄つ
て、疾く召し候へ。とて押揚げたり。餘りにや押したりけむ、弓
手の方へ乗越して、伏しざまにどうと落つ。急ぎ引起して見
れば、顔に砂ひしと付き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝こ
の體を見て、日頃は大将とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、
「あの信賴といふ不覺人は臆したりな。」とて、日華門を打出で
て、郁芳門へ向かはれければ、信賴も鼻血押拭ひ、さかくして
馬に搔乗せられ、待賢門へ向かはれるが、物の用に合ふべ

穆王 周の穆王。八頭の駿
馬を驅つて天下を巡行せ
りといふ。

大将 信賴は救によらず、
自ら大将に任ず。

しごも見えざりけり。

左衛門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に残し置き、五百餘騎にて押寄せて呼ばはり給ひけるは、この門の大將軍は信賴卿と見るは僻目か。かく申すは、桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衛門佐重盛、生年二十三と名乗りかけければ、信賴返事にも及ばず、それ防げ侍ごも。こゝて引退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし。我先にこ逃げければ、重盛愈勇みて大庭の椋の木の下まで攻付けたり。義朝これを見て、惡源太はなきか。信賴といふ大臆病人が、待賢門をはや破られつるぞや。かの敵追ひいだせと宣ひければ、承り候。こゝて駈けられけり。續く兵には、鎌田兵衛、後藤兵衛、佐々木源三、波多野次郎、三浦荒次郎、須藤刑部長、井齋藤別當、岡部六彌、太猪俣小平六、熊谷次郎、平山武者、所金子十郎、足立右馬允、上總介八郎、關

太宰大貳 太宰府の長を帥といひ、次を大貳といふ。權帥を置きこ以後は、大貳あれば權帥を置かず、權帥あれば大貳を置かず。

次郎、片桐小八郎大夫以上十七騎、轡を雙べて馳向かふ。

義平、大音聲を揚げて、この手の大將は誰人ぞ。名乗れ、聞かむ。かく申すは、清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝の嫡子、鎌倉の惡源太義平と申す者なり。生年十五歳、武藏の大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を討ちしより、此の方度々の合戦に一度も不覺の名を取らず、年積つて十九歳、見參せむ。こゝて、五百餘騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、豎様横様、十文字に、敵をさつと蹴散らし、て、端武者ごもに目なかけそ。大將軍を組んで討て。櫛の匂の鎧に、蝶の裾金物打つて、黃桃花毛の馬に乗つたるこそ、重盛よ。押雙べて組んで落ち、手捕にせよ。こゝ下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ごも、與三左衛門、進藤左衛門を始として、百騎ばかりが中にぞ隔りける。惡源太を始として、十七

大藏 埼玉縣比企郡菅谷村。
帶刀先生 兵仗を帯びて東宮に侍する武官を帶刀といふ。先生はその長官の稱。

騎の兵ども、大將軍に目をかけて、大庭の椋の木の中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻して、組まむ組まむこぞ揉うだりける。十七騎に駈立てられて、五百餘騎叶はじこや思ひけむ、大宮表へさつこ引く。

大將左衛門佐の弓杖突いて、馬の息を繼がせ給ふ處に、筑後守つこ参りて、曩祖平將軍の二度生まれ替り給へる君かな。こ向かうざまに譽め奉れば、今一度駈けて家貞に見せむこや思はれけむ、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又大庭の椋の木まで攻寄せたり。

又惡源太駈向かひ、見廻して言ひけるは、只今向かひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ洩らすとも、今度に於ては餘すまじ。押雙べて組みて捕れ、兵ども。こ下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、われ先にこ進みけ

筑後守 平家貞。

平將軍 平貞盛。

れば、今度は、難波次郎、同じき三郎瀬尾太郎、伊藤武者を始として、百餘騎が中に隔てたるに事こそせず、惡源太弓をば小脇にかい挟み、鎧ふんばり突つ立ちあがり、左右の手を舉げ、幸に義平源氏の嫡々なり。御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はむ。寄れや、組まむ。こ言ふまゝに、先の如く大庭の椋の木の下を追廻して、五六度までこ揉うだりけれ。

重盛組みぬべうもなくや思はれけむ、又大宮表へ引いて出づ。惡源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げばこそ、敵度々駈入るらめ。あれ速かに追出だせ。こいひ遣されければ、俊綱馳せてこの由を言ふに、承り候。進めや者ども。こて、色も變らぬ十七騎、大宮表に駈出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば、馬の足

瀧口 藏人に屬し、禁裏の警衛を司る職名。

を立てかねて、大宮を下りに、二條を東へ引きければ、わが子ながらも義平は、よく駈けたるかな。あ、駈けたり。こぞ譽められける。

大將重盛與三左衛門景安、進藤左衛門家泰、主從三騎駈けはなれ、二條を東へ引かれければ、惡源太鎌田にきつこ目くばせて、此處に落つるは大將こころ見れ返せや。こて追つかけたり。既に堀河にて追詰めけるが、弓手の方に材木多く充ち満ちたるに、惡源太の乗り給へる馬片なつきの駒にて、材木にや驚きけむ、馬手の方へ蹶け飛んで、小膝を折つてごうこ伏す。鎌田兵衛延ばさじこ、十三束取つて番ひ、よつぴいてひようこ射る。重盛の射向いぢの袖にはたこ中りて飛返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちようこ中りて、籠かかつぎ碎けて跳り返れり。惡源太、これは聞ゆる唐皮かといふ鎧よろいござん

堀河 大宮通と洞院通との間の通。

押附 鎧の背の最上部にある板。

籠かつぎ 矢竹と鎌と相接する所。

唐皮といふ鎧 平家重代の鎧。

なれ。馬を射て、落ちむ處を討て。こ下知せられければ、復よつぴいて、追ひざまに筈の隠るゝほど射込みたり。馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳ね落され、兜も落ちて大童になり給ふ。鎌田堀河を馳越えて、重盛に組まむと落合ふ。

重盛近づけては叶はじこや思はれけむ、弓の弭ひにて鎌田が兜の鉢をちようこ突く。突かれてよるめく間に、兜を取つて打着つゝ、緒を強くこを締められけれ。與三左衛門馳寄つて中に隔り、申しけるは、漢の紀信は高祖の命に代りて滎陽の圍を出し、終に天下を保たせき。主辱づかしめらるゝ時は臣死すと言ふにあらずや。景安此處に在り、寄れや、組まむ。こ言ふまゝに、鎌田兵衛と引組んで、取つて押へける處に、惡源太馬引起し、これも堀河を馳越えて、重盛に組まむと飛んでかゝりけるが、鎌田をや助けむ、大將をや討たむと思案しけ

大童 髪かみの結びが解けて、童子の髪かみの如く垂れ亂るること。

漢の紀信云々 漢の高祖、項羽に滎陽に圍まれし時、紀信は高祖と偽り稱して城門を出て、その隙に高祖を脱せしむ。

れども、大將には復も寄せ合ふべし、正家を討たせては叶は
じと思ひ、與三左衛門に落合うて、三刀刺して首を取る。重盛
は、憑み切つたる景安討たせて、命生きて何かせむとて、既に
悪源太と組まむとせられけるを、進藤左衛門馳來り、家泰が
候はざらむ處にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれ。こ
て、わが馬を引向け、中に隔てて悪源太とむす組む。正家は
重盛に組まむとしけるが、主を討たせては叶はじと思ひけ
れば、進藤左衛門に落重なつて首を搔く。この間に、重盛は虎
口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからま
しかば、助り難き命なり。（平治物語）

寒月や衆徒の群議のすぎてのち

蕪村

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

同

瀧口に燈を呼ぶこゑや春のあめ

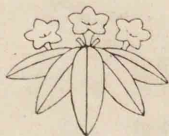
同

一五 名残の星月夜

唐船の甲板には笹龍膽の定紋つきたる幕を張渡す。正面の奥
は遙かに相模灘を見やりたる由比が濱邊の景色なので、沖の地
平線ばかりが見えて、陸は少しも見えず、十六夜の月は既に高く
昇つて散雲もない。海波が蒼茫と月夜らしく煙つてゐるばかり
で、月そのものは見えない。星があちこちに燦々してゐて、所謂星
月夜の風情が著しい。實朝は、徐かに御座疊を離れて、奥の舳へと歩み、
音が高いやがて實朝は、徐かに御座疊を離れて、奥の舳へと歩み、
欄干に凭り、無言にて正面の沖を見てゐると、正面の奥が、颯と電
光の射したやうに輝いたと見る間もなく、小さい月かと思ふ程
の星が、半空を横切つて、矢の走るやうに、斜に墜落する。實朝はそ
れを見送つて、口の中にて、

實朝「あゝ流星か。」

笹龍膽



と。此のうち、尼御臺、古代紫の僧衣を着し、淺黄の裏頭、手に水晶の珠數を掛け、女童を隨へ、猿王に案内せられて上手より登り來る。實朝これを見て、急ぎ席に戻り、うやくしく尼公を上手の御座疊に請じつゝ、兩手をつきて、

「これはく、思ひがけませぬお渡り。略儀御免下されませう。」

尼御臺此の中は、聊か風邪氣のやうにも聞きました。が、それは早速に本復し、心盡くしと聞いた。此の船の船おろしも、ごうやら一わたりは濟んださうで、わらはも蔭ながら喜ばしう思うてをりました。

實朝「かたじけなう存じまする。」

と。これにて、尼公は女童へ「退れ。」とこなし、實朝も猿王へ思入、猿王も女童も、共に會釋して、上手へ入る。

實朝 鎌倉三代將軍。源賴朝の次子。右大臣に進み、承久元（一八七九）年正月、その拜賀の禮を鶴岡八幡宮に行ひ、歸途公曉に弑せらる。年二十八。尼公 政子。源賴朝の妻。北條時政の長女。賴家・實朝を生む。嘉祿元（一八八五）年歿す。年六十九。

尼御臺（思入あつて）「さて、卒爾に訪れまして、何事かご不審せられましつらうが、餘の儀ではござらぬ。船おろしもほゞ滯りなう濟んだ故に、豫ておぼし立たれたる通り、結城朝光に奉行せさせ、六十餘輩を召連れ、日ならず渡唐せらるゝやに聞及びました。が、全くのここでござるか。」

實朝「船だに進みますれば、月の中にもご存じます。此の儀は、明日にも改めて御意得まする心得にござりましたに、夜中さしいひ、わざくの御光臨、恐れ入りました。ござりまする。」

尼御臺「さすれば、あれほど繰返し止めましたをも承引めされず。」

實朝「御意に戻りまするは、憚多うござりますれど、醫王山參詣の儀は、此の身一つの爲ではなく、ひこへに源家永代の

結城朝光 下總國結城城主。母は賴朝の乳母。建長六（一九一四）年歿す。年八十七。渡唐 唐土に渡る意。當時は宋の代なりき。

結縁の爲にござりますれば、枉げて御許容下されたうご
ざる。」

尼御臺「いや、身一つの爲ならは格別、源家一統の爲にあら
ば、名代を差遣されても濟みさうなもの。(と少し間を置き
て)今、天下泰平のやうなれども、まだく野心を抱く輩こもから諸
國に少からずして、隙だにあれば、それに乘じて事を擧げ
んとする當節柄に、輕々しい渡唐沙汰は、わらはつや／＼
其の意を得ませぬ。これには何か、深い仔細のあることご
察します。其の仔細によつては止めはしませぬ。どうぞ
それを聞かせて下され。」

實朝「母上のお言葉なれども、此の度の思立は、全く信仰の外
ござりませぬ。」

尼御臺「いやなう、此の母にお包みあるには及ばぬ。まことこのこ

ごをいうて下され。」

實朝「はて、何をお隠し申しませうぞ。」

尼御臺「思入あつてさうおつしやれば言ひませうが、(と少し膝
を進めて)今度の渡唐については、世上一般に、けしからぬ
風説をば申し觸しをりまするぞよ。日頃は思慮分別ある
輩やからさへも、今は半信半疑の有様。おこしは、其の事をばお知
りやつてでござるか。」

實朝「うなづきて」さ、ほのかには聞及びましたが、もごより根
も葉もなく、たはいもないこと。よもや、母上には、それをば
信まことごは遊ばしますまい。」

尼御臺「さ、わらはは信ごは思ひませぬ。なれども、此の春の行掛
りこのかた、おこしと義時ごの仲たがひは、たが目にも明
白。さらぬだに和田一族のことあつてからは、相州一家は、

義時 北條義時。時政の第
二子にして、北條氏第二
代の執權。相模守たり。
頼家を弑し、比企氏、和

將軍家と折合悪しと、世上一般に噂の折から、思ひ寄りぬ
今度の催し。人々いよく、不審を抱く處へ、かてて加へて、
(と聲を潜めて)彼の三首の歌を證據に、京方と謀じ合はせ
て、北條一家を討滅せんず陰謀がおはすなんごこと……。

といひかける。これにて、實朝何事かいはんとす。尼公はそれを止
めて、

「はて、わらははは信じませぬぞ。……わらはは信ぜぬごも專
らの風説。……證據が證據ゆる、上手に事を捌かぬ時は、一
大事となりまするぞ。(と形を改めて)これ、故二位殿は、何故
に屢、任官を辭し召されたか。……何故に禁裡とは遠ざか
り、攝關の輩に虚位を擁かせ、名を棄てて實を取り、天下一
統の基を此の鎌倉にて開かれましたぞ。いふまでもなく、
公家政治の頼み難いのを、さうにお見抜きあつたればこ

田氏をも亡す。後に承久
の亂に仲恭天皇を廢し、
三皇上を流し奉る。元仁
元(一八八四)年近習に弑
せらる。年六十二。
和田云々。和田義盛は北條
氏の專横を怒り、建保元
(一八七三)年舉兵して敗
死す。年六十七。
相州一家。北條義時の一
家。

三首の歌。金槐集に「太上
天皇御書下預時歌」とい
ふ詞書にて次の三首を載
せたり。
大君の勅をかこみ父母
に心はわくとも人には
めやも
山は裂け海はあせなむ世
なりとも君に二心わがあ
らめやも
ひむがしの國にわがをれ
ば朝日さすはこやの山の
かげさ成りにき
故二位殿。源賴朝。

そでござる。これは今までも、幾度こなう話した事ぢや。よ
もや、京方の煽動に乗つて、今更逆戻りの公武合體などを
思ひ立ちめされうとは思ひませぬ。……なれごも(といひ
かけて、思入あつて)何處にか火が無うては、立たぬ煙ごも
見ゆるあの三首の歌……。

といひかけるを止めて、

實朝、母上、しばらく。……成る程、あの三首の歌は、仙洞御所へ
の私のお返事には相違なれど、それは今より三年も前
たゞかたじけなき御内勅に對し奉つて、二心なき由を誓
ひ申したまでのこと。若し公武の兵を合はせて、事を擧げ
ん下心なごがありましたら、和田一族が謀叛の折に、なん
で手を束ねて見てをりませうぞ。其のお疑はお晴し下さ
りませ。

尼御臺「いや、わらはは疑ひませぬが、……が、既にかうした浮説が立ち、人皆疑ひ危むからは、其の危みが原となつて、如何なる珍事が起るやも圖り難く、或は又、其の珍事をば機會にして、諸國にも謀叛起り、かてて加へて、日頃さうした騒動をば待ちに待つ京方から、不意に大軍を攻下し、でもしやうものなら、故二位殿が五十年の間、血の涙、血の汗を絞られた大業も、水の泡同然となつて……。」

「源氏も……北條氏も……滅亡は目前でござるぞ。……よしさうまでにはならずとも、内輪の騒動はまぬかれ難く、わらはの心勞は限り知られませぬ……。」

と、暫く言葉を繼ぎかねてゐたが、やがて、

「わらはの頼みでござる。今度の渡唐は思ひ止つて下され。」

實朝「母上の仰せながら、それがしに異心があらば兎も角も、氣もない上は、其の御心勞には及ばぬ筈。かりに、此の浮説の爲に、何事が起るにせい、根なし事であるからは、立地たちどころに鎮りませう。なほ御懸念ごあらば、明日義時に會うて委曲を盡くし、疑惑の根を絶たせませう。何卒渡唐の儀は御許容下されませ。」

尼御臺「さあ、切なる望ぢやこいふことを、察しませぬ譯ではなけれご……。」

といひさして黙つてゐる。實朝やゝ氣色ばみて、

實朝「すりや母上には、異心のないのを御承知あつても、なほ御許し下されませぬか。」

と怨めしげに、やゝ手強いふ。

尼御臺「静かに、只今は許されませぬ。せめて世繼の出来るまで

は。
 實朝[○]せめて世繼の……ご仰せあるは、船旅の危さをおぼしめされての御懸念でござりますか。若し然らんには、萬一の場合には、丁度京都よりお召戻しのあの公曉をば、跡目に直されても相濟みませう。……母上、何ぞ此の望だけは、お許し下され。」

と實朝思ひ入つたる體にて、頭を下げ、兩手をつきて頼む。尼公俯向いて黙つてゐる。實朝は覺えず向を見詰め、獨語のやうに、

「六十餘州の總追捕使も名ばかり、天下の將軍も名ばかり、たま／＼思ひ立つた渡唐の望さへ遂げられぬか。」
 と慨然たる思入。尼公はなほ默然としてをり、やがて始は俯し目がちに極靜かに、

尼御善、その述懷は、尤も至極ぢや。……おここの心中は、よう察

公曉 源頼家の第二子。叔父實朝を弑して己も亦殺さる。年十九。

してをります。頼家があの自暴自棄の晩年を思ふにつけて、おここの此の頃の心の心を推量せぬではなけれど、一天下の重きを以て任せねばならぬ身は、……匹夫匹婦の夢にも知らぬ……辛さやわびしさを忍ばねばなりませんぬ。」

といひつゝ、徐かに膝を進めて、

「これ、打明けておつしやらずとも、母でござる……。」

といひかけたが忽ち落涙の體にて、

「何の察せいでをりませうぞい。これ、おここの世をあげきなう思ふ餘り、家をも、母をも、皇國をも、振捨てて唐土に身を置いて、餘生をば送る所存であらうが。」

と涙聲にていふ。實朝はちつと俯向いたまゝ黙つてゐる。

「將軍の名はあれど、政道の大方は執權の手心まかせ、いは

頼家 頼朝の長子。二代將軍となり、北條氏を亡さんとして、却つて伊豆修禪寺に幽せられ、元久元年（一八六四）獄せらる。年二十三。

ば飾物に過ぎぬ境涯。潤達な心から、日頃それをあぢきなう思うてをらるゝことは、さうに見抜いてはをるもの、ここが今いうた一天下の重きに任ずる身のつこめでござる。わらはの、今改めていふことをば、どうぞ善う聞分けて下され。」

と、これにて實朝も愁然としたる思入。

「成る程、あの義時の振舞が、折々目に餘つたこともあらう。身最肩をして此の母が、庇ふこのみ思ひめされたこともあらうが、こゝが政道の是非ない處でござる。……一代の英雄たる父御のお薨れなされてからは、名をも實をも兼ね具へて、將軍となるべきものの、又こあらう筈がないゆゑ、權力はいつとなく執權職の手に移つたが、……中頃わらはが思うたには、……いつまでも父御の志を継ぎ、源氏

の血統で此の國を治めうごならば、將軍と執權とは、長く此の姿で並べ存し、朝野内外の怨の的となることは、すべて執權に掌らせ、爲損じあることも、將軍には累ひの及ばぬやうにご思案を定めて、わざと義時が專斷をも大目に見た其の仔細は、(と膝を進めて)油斷のならぬ京方の大企を、見抜いたからのことでござる。なれば、義時が我意我儘にお見やることも、畢竟は家國の爲であり、又おことの爲でもある。ぢやによつて、こゝの道理をば善う辨へ、どうぞ渡唐をば思ひ止つて下され。」

としみぐゝといふ。實朝思入あつて、

實朝「名と實とを能う兼ねぬ不肖の身が、口惜しうござります。」

といつたきりで、暫く無言であたが、やがて、

「母上、源家の血統を絶やすまいといふ御懸念ならば、あの公曉を私の代りになされて、ごうぞそれがしには、曲げてお暇を下されませ。」

とはつきりといふ。これにて頭を垂れてゐた尼御臺は顔を上げ、やゝ氣色ばみて、

尼御臺「これは異なごきをいはるゝ。公曉は既に出家までさせたものでござる。今更何しに還俗をばさせませう……。」

といひかけて、ちつと思入あつて、

「あれを先頃呼戻いたのをば、只管わらはの愛着ゆるぎやごでも思うてかは知りませぬが、これには深い仔細のあることござる。京師に手離して置く時は、いつ、何者に教唆されて、其の手先に使はるゝやも知れぬ故でござる。はて、これとてもまた家の爲ぢや。二つには、おここの爲をば

思うてのごきでござる。」

といひさして、又思入あつて、

「あの義時をたゞ一圖に快からずおぼすのも、畢竟は、胸の底に、さうした僻み心があつて、爲を思うての沙汰をも、身最眞依怙最眞ごばかりおぼすからぢや。……これ、これほごのこごを分けていうても、聞入れては賜はりませぬか。思ひ止られませぬか。家よりも、國よりも、一身が大事でござるか。」

と、實朝なほ俯向いたまゝで、黙つてゐる。尼御臺は、これを見てむつとしたる思入儼然となりて、

「此の上は是非に及びませぬ。家國の安危、政道の大義には易へられませぬ。わらはにも思案がござる。」

と手強く、きつぱりと言つて、實朝の返辭を俟つ。と、實朝も、蒼白な

面をあげて、きつと尼御臺の顔を見る。暫くは、双方沈痛に、目を見合ひたるまゝにて、無言である。浪の音が高く聞える。上手では又雅樂を――低く淋しく――奏し始める。尼御臺は、忽ち頻りに落涙の體で、袖を以て面を掩ひ、やゝ暫くは、歔歔してゐたが、やがて漸く自ら制して、

「如何に天下の爲ぢやこはいへ、……いつまで此の苦をば受けてゐませう。わらはは覺悟を定めました。……頼家・大姫にも死別れ、一幡や千壽の淺ましい死目をも見て、つくづく此の世をあぢきなう思うてをつたに、今又おここにまで見棄てられ、生別の辛さばかりか、いやましに亂れゆく世を見るかと思へば、此の末いつまで、何を頼みに浮世まじらひをしませうぞ。……命長ければ恥多く、悔多し。……餘り長う生き過ぎました。……もう何もいひませぬ。心任

大姫 政子の娘。

一幡 頼家の第一子。
千壽 頼家の第三子の千壽丸。建保元年信濃の人宗親衛に推されて、北條義時を誅せんとして成らず、後再び和田義盛の黨に擁せられて、敗れて自殺す。年十四。

せにしめさるがよい。さらばでござる。……南無……彌陀佛……彌陀佛……。

と涙を拭ひつゝ、靜かに珠數をつまぐり、席を立ち、すぐに上手に行く。

實朝 微かに苦悶の影を浮かべた顔を舉げて、「あゝ、もし、暫く……

……母上、暫くお待ち下され。」

尼御臺 お止めあるは……。

と立ちながら徐かに振返りて、言葉靜かに、

「今いうたこゝを承引あつてか。」

實朝 それほごに仰せある上は、是非に及びませぬ。……思ひござりませう。」

と、これにて尼公は徐かに元の席に戻りて、更に言葉靜かに、

尼御臺 それ聞いて安堵しました。善う聞分けて下された。嬉し

うござる。禮をいひまする。」

といつて、俯向いてゐる實朝の顔をちつと見おろして、

「ごはいへ、常日頃、唐土の風俗をお好きあつて、假初の器具・調度をさへ彼方を用ひめさるゝほどに懐かしがつてゐめされたものを、家國の爲ごはいへ、そのたゞ一つの望をすら遂げさせぬかと思へば、此の胸が術なうござる。」

と涙を拭ふこなし。

實朝(冷靜に)「そのお氣遣ひは御無用でござります。何事にもさしたる執着の少い我が身は、かういふ折には心安うござります。」

尼御臺「したが、一旦表向に觸れいだされ、既に船おろしの祝までも濟んだものを、たゞこのまゝにもされまいが、その始末はごうしたものの。」

實朝「いや、それも御懸念には及びませぬ。幸ひまだ波打際まで下りたばかり、十分には浮かばぬ船。何ごしても深みへは出ぬと言ひ觸し、このまゝ、いつまでも濱邊に棄ておいて朽ちさせませう。」

と、これにて、尼御臺はうなづき、

尼御臺「では、それも安心ぢや……………」と思入あつてすれば、明日又改めて會ひませう。」

と席を立ちかけたが、悄然としてゐる實朝の姿を見て立ちかねて、

「あゝ然しごうやらおこことをば、生理めにでもするやうな心地がして……………」

といひさして、又暫く落涙の體、實朝はたゞ默然としてゐる。やがて、實朝は座右の驛鈴を取つて振鳴らすと、上手より猿王出で來

る。これにて、尼御臺は涙を押拭ひつゝ立つ。

(坪内逍遙「名残の星月夜」)

武士の矢なみつくろふ籠手の上に霰たばしる那須のし
のほら

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよ
る見ゆ

神といひ佛といふもよの中の人のこゝろのほかのもの
かな

ときにより過ぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめた
まへ

物いはぬ四方の獸すらだにもあはれなるかなや親の子
を思ふ

春風は吹けど吹かねど梅の花咲けるあたりはしるくぞ
ありける (源實朝「金槐和歌集」)

坪内逍遙 文學博士。愛知縣の人。安政六年生まる。東京帝國大學政治科の出身。早稻田大學名譽教授。

参考資料

金槐和歌集 三卷。鎌倉右大臣家集ともいふ。源實朝の歌集なり。参考書には、

森 與重 「訂正増評金槐集」

佐佐木信綱 鎌倉右大臣家集

同 「校註金槐和歌集」

齊藤茂吉 「金槐集私抄」

小林好日 「金槐集評釋」

一六 蘆の若葉

夕月夜しほみちくらし難波江の蘆のわか葉を越ゆ
るしら波 藤原秀能

難波江のあたりは、心あらむ人に見せばや。こいつたほどの美しい早春の景である。夕月のほのかな光が海を照らしてゐる。沖から潮が満ちて来るらしい。波頭は白い光を見せて岸に近づく。岸には蘆が芽を出してゐて、その浅い緑は譬へ難く懐かしい。波頭はひた／＼とそれを越えて岸を打つ。早春のうら若さのうちに、大いなしかも静かな潮の満ちて来る勢を蘆の葉に見るといふのであつて、清新優雅な感じ、美しい夢、清い幻の感じが漂つてゐる。そこに作者の官能の鋭敏さがしのばれる。春江月夜に於けるこの活動に満ちた

参考資料

新古今和歌集 二十卷。

建仁元年十一月三日、後鳥羽上皇の詔を受けて、

源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・

寂蓮法師等が撰進せる

ものにて、短歌千九百八

十八首を分類列載せり。

別に藤原良經の和文の序あり。参考書には、

東 常縁 「新古今和歌集鈔」

加藤馨齋 「新古今増抄」

本居宣長 「新古今集美濃の家裏」

同 「新古今集美濃の家裏折添」

石原正明 「尾張の家苞」

鹽井正男・大町芳衛 「新古今和歌集詳解」

藤原秀能 河内守秀宗の子。和歌を以て後鳥羽上皇に召され、北面に伺候

繪畫的光景を歌に詠じたことは、後にこそ多いのであるが、新古今集の頃にあつては、この歌の右に出づるものはなかつた。まことに詩材も歌調もよく洗煉せられて、客觀的描寫の妙を盡くしてゐる。

逢坂やこずゑの花を吹くからにあらしぞかすむ關の杉むら

逢坂の關では嵐が櫻の花を吹散らす。その嵐は杉の村立の緑の前を吹過ぎるので、落花が交つて居るこの嵐までも美しく霞んで見えるといふのである。この「嵐ぞかすむ」といふのは、作者の大膽な創意であつて、誇張には相違ないが、情景を躍如たらしめてゐる。新古今集の當時には、嵐もしろき春の曙「散る花の月にあまぎる明方の空」などといふ誇張的修辭の絢爛たるものが流行したのである。

し、新古今集の撰定に參與す。仁治元(一九〇〇)年卒す。年五十七。難波江、今の大阪市及びその附近の未だ海なりし時の稱。心あらむ云々、能因法師の歌に「心あらむ人に見せばや津の國の難波わたり」の春の景色を。逢坂、大津市の南、京都府滋賀縣との境にある坂路。主要なる交通路たりしを以て、往昔はこゝに關所を設けたり。宮内卿、後鳥羽天皇の宮女。巨勢師光の女にて、和歌・繪畫に巧なりき。

嵐もしろき云々、後鳥羽天皇の御製に「み吉野の高嶺の櫻散りにけり嵐も白き春のあけぼの」散る花の云々、二條院讃岐の歌に「山高み嶺のあらしに散る花の月にあまぎるあけがたの空」

庭の面はまだ乾かぬにゆふだちの空さりげなく澄

める月かな

源 賴 政

夕立が激しく降つて、迅雷風烈、天も地も大動亂の中に包まれてゐたが、それも一時、雲も忽ち散じ、雷も收つて、空は隈なく澄渡つた。庭の面には庭潦がまだ湛へてゐて、雨の餘波を見せてゐるのに、月はいつしか清光を千里に及ぼして、少しも先刻の大騒擾を知らぬやうに見えるといふのである。この歌には特に奇警な所はないが、夕立前後に於ける急激な氣象の變化が巧に捕へられて居る所に價がある。ここに「空さりげなく」の一句は、緊約してゐて含蓄が深い。

明けばまた越ゆべき山の峰なれや空ゆく月のするのしら雲

藤原家隆

旅し疲れて旅館に宿つた。外は月明で長空一碧、たゞ清光

藤原家隆、一代の詠歌六萬首に上る。宮内卿に任ぜらる。嘉祿三(一一八五)年歿す。年八十。

が満ちわたつてゐるのみである。更けゆく月を眺めてゐる
と、月の傾いてゆく方に白雲の一團がある。それは明日のわ
が旅路に當る山にかゝつて居る白雲であるらしい。今日も
高い峻しい山の雲を履んで、具さに酸苦を嘗めたのであつ
たが、明日もまたあの雲を衝いてあの山を越えなければな
らぬのか。苦しい旅、佗しい旅、都では思ひもかけなかつた旅
であるといふのである。この歌には作爲の跡が見えぬでも
ないが、大體に於て自然で、清新で、優雅である。ここに「空ゆく
月のするのしら雲は巧な修辭である。浮動する雲の有様を
さらへたのも、旅の心地にふさはしい。

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋のあき
の夕ぐれ

藤原定家

秋の夕べの歌として極めて有名なものである。海邊に來

藤原定家 俊成の子。新古今集・新勅撰集の撰者。仁治二(一九〇一)年歿す。年八十。

て見渡す。そこには怪しげな海人の苫屋がほの黒く點在
してゐるのと、夕べの波頭が渚に白く碎けてゐるのこが見
えるのみである。極めて簡素な景色ではあるが、見入つて居
ると幽玄の情味が何處からともなく湧いて來る。春の花、秋
の紅葉もこの景色には到底及ばないといふのである。この
歌には當時の文學の生命ともいふべき深い幽かな氣分が、
著しく強く鋭く感じられる。花やかな享樂生活から遠ざか
つて、日夜に懊惱し續けた末に、かういふ詩境を求めて、わが
心を閑寂の境地に安住させた當時の歌人の心境として、は、
「なかりけり」と誇張したのも、平生宮廷に生活してゐた人の、
たまく、漁村の秋の夕ぐれの景色を見て、その深く感じた
心持を言ひ現したものと、寧ろ極めて自然である。尤
もかういふ詩美はすでに源氏物語に、遙々この物のこゝこほ

新古今集傾向の人々
加藤枝直 伊勢の人。江戸に出でて與力となり、眞淵に學ぶ。天明五(二四四五)年歿す。年九十四。
「春されば葦咲く野の朝がすみ空に雲雀の聲ばかりして」
本居宣長 卷七、四〇頁參照。
「玉しまや川上さほきうめが香もながれて匂ふさこの春風」
加藤千陰 枝直の子。父に繼いで與力たり。文化五(二四六八)年歿す。年七十四。
「八重霞かすみながらにうちしめり野つらの庵に春雨ぞふる」
村田春海 江戸の人。千蔭と共に江戸派の中心歌人たり。文化八(二四七二)年歿す。年六十六。
「住の江の浦の松風こふたえて霞にこもる沖つ白浪」
清水濱臣 江戸の人。春海の門人。文政七(二四八

りなき海面なるに、なかく、春秋の花紅葉の盛なるよりは、たゞそこはかこなうしげれるかげごも艶めかしきに「こあつて、定家の發見に依るものではないが、その情趣を味はひ得た時の喜びは、恐らくは前代の人のそれとは著しい距りがあつたであらう。

寂しさはその色こしもなかりけり眞木立つ山の秋の夕ぐれ 寂蓮法師

同じ作者の、村雨の露もまだひぬ眞木の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮の詠は客觀的であり、これは主觀的であつて、しかもその情趣は頗る違つてゐる。山々には眞木が繁りあつて、深い暗い色をして連なつてゐるのに對するこゝいひ難い寂しさを感じて來る。しかしこの寂しさは何が原因してゐるのであるかこ取りたてて指すべき色もない。たゞ何こな

寂蓮法師 俗名は藤原定長。伯父藤原俊成に養はれて中務少輔たり。定家の生まるゝに及びて出家す。建仁二(一八六二)年歿す。

四)年歿す。年四十九。「伊勢の海や霞をそめて出づる日の潮瀬に匂ふ春のあけぼの」本居春庭 宣長の子。文政十一(一四八八)年歿す。年六十六。「霞よりおちくるほごも夕ひばり空にいられて聲ぞちかづく」

く薄曇の夕暮の山が底知れず淋しいこゝいふのである。如何にも茫莫とした境地から來る悲哀の趣を、よく道破した歌である。これこ指すものがないから一層淋しさが強いのであらう。そこには禪宗などが盛行する前提をなした感があつて、宗教的趣味が深い。

み吉野の山のあき風さよふけてふる里さむくころ 藤原雅經

人口に膾炙してゐるものである。吉野山下は夜も既に更けて、み山を吹きおろす秋風のいこゝ凄涼になりまさつて行くこの里の深夜、里人は身にしみわたる寒さをも厭はないで、冬仕度のために砧を打つ。その音が微かに聞えて、愈ゝうすら寒い寂しい感じがするこゝいふのである。これは古今集に「み吉野の山の白雪積るらし故里寒くなりまさるなりこ

藤原雅經 新古今和歌集撰者の一人。承久三(一八八二)年歿す。

み吉野の山の云々 坂上是則の詠。

あるのを本歌としたもので、その詞の位置さへかへずに、更にそれに擣衣の響を加へたのが、この作者の技倆である。細川幽齋は「かやうの歌をこそいかにも信仰すべけれ」と激賞して居り、本居宣長も亦本歌より勝れてゐると稱揚して居る。

人住まぬ不破の關屋の板びさし荒れにしのちはた

だ秋の風

藤原良經

守る人も住まなつた不破の關屋の板庇の荒廢の跡は、たゞ秋風の寂しく吹渡るのみであるといふので、昔は往きかふ人に賑はつた關所の、今は荒涼たる情景となつて居るのをありのまゝに詠んだ歌である。情趣も豊かで餘韻が深い。殊に「たゞ秋の風」といひ棄てた所は作者の新工夫であつて、一首を力強いものにしてゐる。

細川幽齋 俗名は藤孝。足利氏の武將。慶長十五(二二七〇)年歿す。年七十。歌人として知らる。

藤原良經 左大臣より攝政となり、建永元(一八六六)年歿す。不破の關 岐阜縣不破郡にありし關所。

さむしろのよはの衣手さえくくって初雪しろし岡の

邊の松

式子内親王

昨夜、岡の邊に宿つた。閨の中は袖もいと冷えて夜寒が身にしみたが、今朝見ると寒かつたのも道理で、岡の松の上には初雪が白々と降りつもつて居るといふのである。そこには身に沁みるやうな寒さ、初雪のおもしろさ、緑に白を取りまぜた美しさがあつて、風情の豊かさ氣品の高さを感ずるのである。この結句の聲調の高さは他に類が少ない。さむしろの初句から「初雪白し」の第四句までは何人も想到し得る所であらうが、それを最後の「岡のべの松」と一轉せしめた技倆は、上手ならでは出來ぬことである。尾張の家苞に、「一度これを吟ずれば五月寒さを生ずる歌なり。内親王の御上にてかく雄壯なる詞の出でおはしますは、あやしきまでにめで

式子内親王 後白河天皇の皇女。賀茂齋宮となりて三宮に准ぜらる。建仁元(一一八二)年薨す。

尾張の家苞 五卷。石原正明の著。本居宣長の「美濃の家裏」の説を評論したるものなり。

たし。と推奨して居る。雪降れば峰のまさかきうづもれて月にみがける天の香具山

大和平野に立つてゐる香具山を望むと、満山が白雪を被つてゐる。その頂に生ひ茂つてゐる榊も埋れて、梢も枝も分らなくなつてゐる。それに澄切つた月光が照渡つて居るので、山の姿は白玲瓏として、恰も磨かれた水晶で出来てゐるやうであるといふのであつて、極りなき奇景であり、美観である。神代からの名山として傳統の句の高い天の香具山に雪及び月を配した著想が、すでに興味を惹起す。香具山に配するに眞榊を以てしたのも神々しい。想像から捏出した作には相違ないが、月に磨けるの一句は殊に力があつて、玉山が目前に湧出するやうな心地がする。(尾上柴舟の文による)

藤原俊成 卷七、一五〇頁
参照。

尾上柴舟 卷七、一五六頁
参照。

國文學形態史圖表 (國文選附録)

代 現		世		近	
後 以 治 明		代 時 戸 江			
詩體新		歌長		歌長	
歌短		歌短		歌短	
句俳		歌狂		歌俳	
		句俳		歌俳	
		柳川		歌俳	
[字活]		語物		[字活木]	
説小		(紙草世浮)		(紙草世浮)	
		(紙本)		(紙本)	
		(紙草名假)		(紙草名假)	
話童		話俗		話俗	
話童		話俗		話俗	
話童		話俗		話俗	
劇(劇歌)		伎舞歌(本脚)		璃瓏淨	
記日行紀筆論評		記日行紀筆論評		記日行紀筆論評	
		學儒(文詩漢)		學儒(文詩漢)	
學文米歐		學蘭		學蘭	

世	近			世	中		代	古		古	上	時代 種別
	明	代	時		代	時		代	時			
			歌長						歌長			學文の誦傳
			歌短			歌短 (學歌)		歌短	歌短			
		歌狂							歌頭旋			
		句俳	諧俳			歌連			歌片			
		柳川										
[字活]			[字活木]						[明發字假]			
		語物 (紙草世浮) (紙双草讀合) (本本)	語物 (記軍) (話説)			語物 (記軍) (話法) (話説)		語物 (話史) (篇短) (話説)	説傳			
童活 童活 童活		(紙草名假)	紙草伽お									
		謠俗				謠俗			歌樂神 樂馬催			
			曲謠 言狂			曲宴						
						樂猿樂田						
		伎舞歌 (本脚)	璃瑠淨			本の舞						
			璃瑠淨									
		記日 行紀 筆隨 論評				記日 行紀 筆隨 論評			歌旅 謠俚			
		學儒 (文詩漢)				史經 文詩漢 (學文山五)			史經 文詩漢		學文洋東	
		學蘭				學文洋西						

國文學形態史圖表 (國文選附録)

するに眞榊を以てしたのも神々しい。想像から捏出した作
には相違ないが、月に磨けるの一句は殊に力があつて、玉山
が目前に湧出するやうな心地がする。(尾上柴舟の文による)

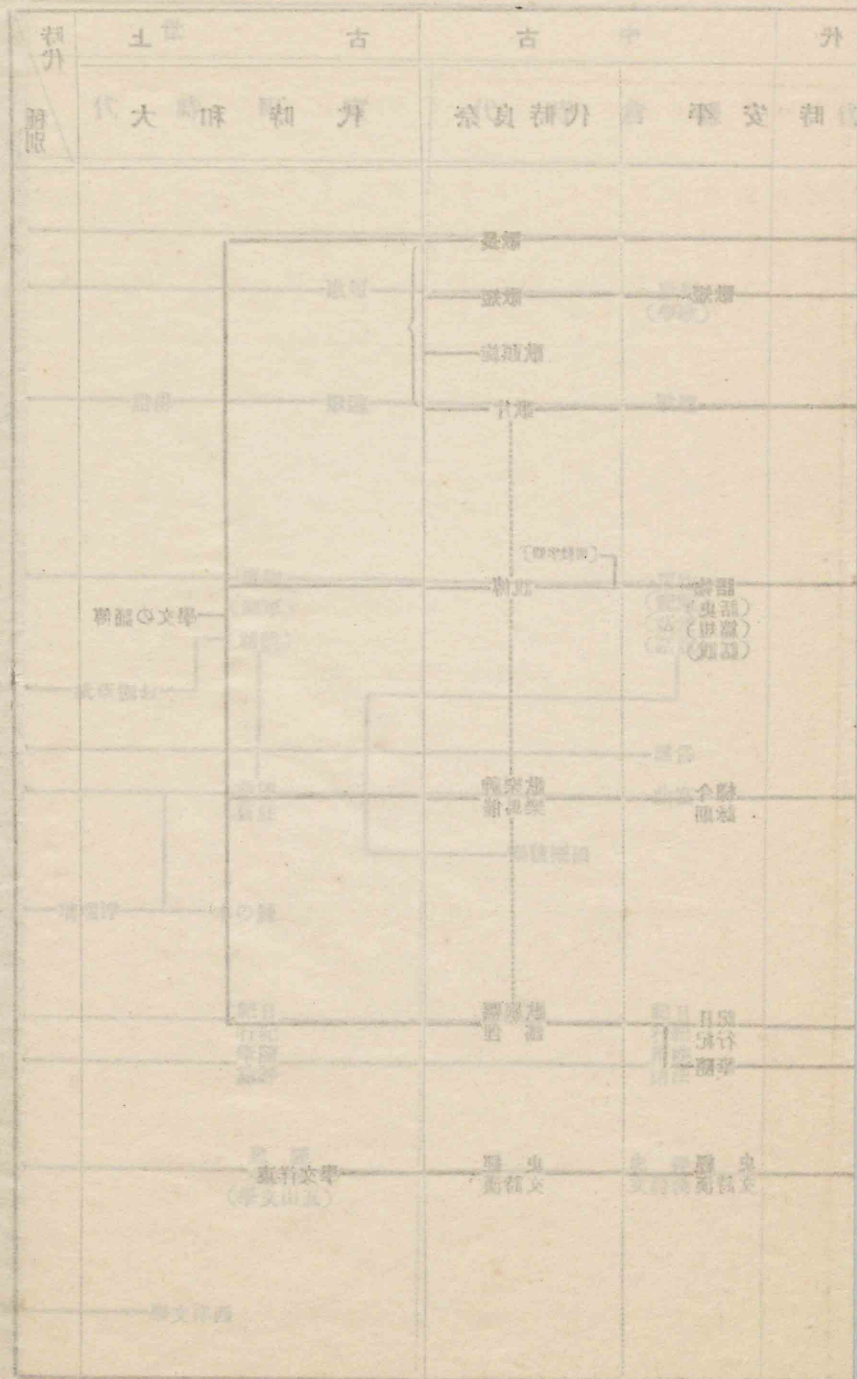
尾上柴舟 卷七、一五六頁
参照。

代 現	世	近	世	中	代	古	古
後 以 治 明	代 時 戶 江	代 時 町 室	代 時 倉 鎌	代 時 安 平	代 時 良 奈	代 時 和	
詩體新		歌長				歌長	
歌短	歌狂	歌短	歌短	歌短 (學歌)	歌短	歌短	
句俳	句俳 柳川	諧俳	諧俳	歌連		歌頭旋	
						歌片	
說小 [字活]	語物 [字活木] (紙草世浮) (紙双草) (本讀) (本合) (紙草名假)	語物 (記軍) (話説)	語物 (記軍) (話説)	語物 (記軍) (話法) (話説)	語物 (話史) (篇短) (話説)	語物 (話史) (篇短) (話説)	說傳 [明發字假]
話童 話民 話童 話民	謠俗	紙草伽お	紙草伽お	謠俗			
		曲謠 言狂	曲謠 言狂	曲宴	樣今 詠朗	歌樂神 樂馬催	
				樂猿樂田			
劇 (劇歌)	伎舞歌 (本脚)	璃瑠淨	璃瑠淨	本の舞			
記日 行紀 筆隨 論評	記日 行紀 筆隨 論評	記日 行紀 筆隨 論評	記日 行紀 筆隨 論評	記日 行紀 筆隨 語法	記日 行紀 筆隨	歌旅 謠俚	
	學儒 (文詩漢)	史經 文詩漢 (學文山五)	史經 文詩漢 (學文山五)	史經 文詩漢	史經 文詩漢	史經 文詩漢	學文洋東
學文米歐	學蘭	學文洋西					

神武 (一一七)	綏靖 (一一二)	安寧 (一一五)	懿德 (一一八)	孝昭 (一二一)	孝安 (一二四)	孝靈 (一二七)	孝元 (一三〇)	開化 (一三三)	崇仁 (一三六)	垂仁 (一三九)	景行 (一四二)	成務 (一四五)	仲哀 (一四八)	應神 (一五一)	仁德 (一五四)
天皇(御在位)	文學者(歿年)	著作物	雜												
		(傳説)													
			百濟王仁來る (九四五)												
	(歌) 日本武尊(七七)														

國文學年表

國文學源流表(國文學附録)



履	中(1030-1035)	(歌謠)	始めて史官を置く(1033)
反	正(1036-1070)		
允	恭(1071-1113)		
安	康(1113-1126)		
雄	畧(1126-1139)		
清	寧(1139-1144)		
顯	宗(1145-1155)	(祝詞)	
仁	賢(1148-1158)		
武	烈(1158-1166)	(壽詞)	
繼	體(1167-1191)		
安	閑(1191-1195)		
宣	化(1195-1199)		
欽	明(1199-1212)		
敏	達(1212-1245)	(宣命)	百濟佛像・經論を獻す(1212)
用	明(1245-1247)		
崇	峻(1247-1253)		
推	古(1253-1258)		
舒	明(1258-1261)		
皇	極(1261-1265)		
孝	德(1265-1274)		
齊	大化 白雉 明(1274-1275) 智(1275-1276)		十七箇條憲法成る(1264) 始めて留學生を隋に遣す(1267) 厩戸王子薨す(1268) 大化新政成る(1275) 八省百官を置く(1279)

弘	文(1271-1272)	(詩) 弘文天皇(1271)		
天	武(1271-1276)	(詩) 鏡津女皇子(1276)		
持	統(1276-1277)	(歌) 柿本人麿(?)		律令を撰ぶ(1270) 都を奈良に奠む(1270)
文	武(1277-1278)			諸國に風土記を作らしむ(1277)
元	大寶 慶雲 明(1278-1279)	(學) 太安麿(1278)	古事記(1271) 日本書紀(1260) 出雲風土記(1253)	
元	和銅 正(1279-1284)	(學) 太安麿(1278)		
聖	靈龜 養老 武(1284-1289)	(歌) 山部赤人(1284) 山上人(1284) 舍人(1284) 親(1284)		
孝	神龜 天平 謙(1289-1290)	(歌) 橘諸兄(1287)	萬葉集 懷風藻(1211)	
淳	天平感寶 天平勝寶 天平寶字 仁(1290-1294)			
稱	德(1294-1295)			
光	天平神護 神護景雲 仁(1295-1296)	(學) 吉備真備(1295)	歌經標式(1233)	
桓	寶龜 武(1296-1297)	(學) 淡海三船(1295)		
	天應 延曆	(歌) 淡海三船(1295)		

平 城(四六一-四六九) 大同	嵯 峨(四四九-四六三) 弘仁	淳 和(四四三-四四九) 天長	仁 明(四九三-五一〇) 承和 嘉祥	文 德(五一〇-五一八) 仁壽 齊衡 天安	清 和(五一八-五二六) 貞觀	陽 成(五三六-五四四) 元慶	光 孝(五四四-五四七) 仁和	宇 多(五四七-五五七) 寬平	醍 醐(五五七-五五九) 昌泰 延喜	朱 雀(五九〇-六〇六)
(學)	(學)	(學)	(學)	(學)	(學)	(學)	(歌)	(歌)	(歌)	(歌)
良岑安世(四九九)	弘法大師(四九五)	菅原清公(五二二)	菅原業平(五四四)	香平(五三九)	小野小町(?)	在正 昭平(五五五)	伊坂上是勢(五九九)	紀長谷雄(五七七)	菅原道真(五五三)	伊坂上是勢(五九九)
續日本紀(四七五)	文華秀麗集(四七六)	續日本後紀(五二九)	文德實錄(五三九)	竹取物語 伊勢物語	新撰字鏡 古今和歌集(五五五) 延喜式(五七七)	大和物語 後撰和歌集(六二二) 天徳歌合(六三〇)	土佐日記	宇津保物語	落窪物語	枕草子 源氏物語 紫式部日記
都を平安に遷す(四七四)	弘法大師高野山を開く(四七四)	勸學院立てらる(四八二)	遣唐使を廢す(五四五)			初めて和歌所を置く(六二二)			藤原道長關白となる(六三五)	

承平 天慶	村 上(六〇六-六一七) 天曆 應和 康保	冷 泉(六二七-六三九) 安和	圓 融(六三九-六四四) 天祿 貞元 天延 永觀	花 山(六四四-六四六) 寬和	一 條(六四六-六七一) 永延 永祚 長保 長弘	三 條(六七一-六七七) 長和	後 一條(六七七-六八六) 寬仁 治安 萬壽 長元	後 朱雀(六八六-七〇五) 長曆 長久 寬德
一六〇〇	(歌)	(歌)	(歌)	(歌)	(歌)	(歌)	(文)	(文)
紀貫之(六一六)	壬生忠岑(六三三)	源順(六四三)	清原元輔(六五〇)	大江匡衡(六七七)	清少納言(?)	紫式部(?)	源氏物語 紫式部日記	枕草子 源氏物語 紫式部日記

後冷泉(七五—七六) 永承天喜 康平治曆	後三條(七八—七九) 延久	白河(七三—七四) 永保承曆 應德	堀河(七六—七七) 寬治嘉保 永長承德 康和長治	鳥羽(七六—七七) 天仁天永 永久元永 保安	崇徳(七三—七四) 天治大治 天承長承 保延永治	近衛(七—八五) 康治天養 久安仁平 久壽
(歌)藤原公任(七二) (歌)赤泉式部(??) (歌)和泉式部日記 新撰隨腦 和漢朗詠集 蜻蛉日記 狹衣	(文)大貳三位(??) 堤中納言物語 更級日記 後拾遺集(七四六) 今昔物語 榮花物語	(文)源隆國(七七)	(學)大江匡房(七二)	(歌)藤原基俊(??) 金葉集(七六七)	(歌)源原基俊(??) 大鏡 詞花集(八〇四)	
保元(八六) 平治(八七) 源賴朝幕府を鎌倉に開く(八四六)			高陽院歌合(七五四) 堀河後度百首(七六六)			

後白河(八五—八八) 保元	二條(八一—八三) 平治永曆 應保長寬 永萬	六條(八三—八四) 仁安	高倉(八三—八四) 嘉應承安 安元治承	安徳(八四—八五) 養和壽永 元曆	後鳥羽(八五—八八) 文治建久	土御門(八六—八七) 正治建仁 承元建永	順徳(八七—八八) 建曆建保	仲恭(八八—八九) 承久	後堀河(八九—九〇) 建久
(歌)藤原顯輔(八五)	(歌)平忠度(八七)		(歌)藤原俊成(八四)	(文)鴨長明(八七) 源實朝(八七九)	(歌)西行法師(八五)	(歌)藤原俊成(八四)	(文)源實朝(八七) 源實長朝(八七九)	(歌)慈鎮和尚(八五)	
保元の亂(八六) 平治の亂(八七)				方丈記 金槐集	山家集 千五百番歌合(八六一) 新古今集(八五) 水鏡 今鏡 住吉物語	源平盛衰記 平家物語 平治物語 保元物語			

貞應 元仁 嘉祿 安貞 寬喜 貞永 條(允二)卷三	天福 文曆 嘉禎 曆仁 延應 仁治	嵯峨 (二九三)一 九〇〇	後 深 草(九六)一 九一九	龜 山(九九)一 一九四	後 宇 多(九四)一 一九四七	伏 見(九七)一 一九六	後 伏 見(九六)一 一九六	後 正 安	乾元 嘉元
貞永式目(八九二) 新勅撰集(八九四)	詠歌大概 東關紀行 撰集抄 宇治拾遺物語 今物語	(歌) 藤原定家(九〇)	續後撰集(九二) 十訓抄(九三) 古今著聞集(九四) 續古今集(九五) 吾妻鑑(九七)	(歌) 藤原爲家(九五)	(歌) 阿佛 尼(九四)	(歌) 飛鳥井雅有(六)	中務内侍日記 野守鏡(九五)	十六夜日記	新後撰集(九三)

昭和五年六月二十三日印
昭和五年六月二十六日發行
昭和五年十一月二十二日訂正印刷
昭和五年十一月二十五日訂正發行

國文選(全十册)
自卷一各金四拾錢
自卷二各金四拾錢
自卷三各金四拾錢
自卷四各金四拾錢
自卷五各金四拾錢
自卷六各金四拾錢
自卷七各金四拾錢
自卷八各金四拾錢
自卷九各金四拾錢
自卷十各金四拾錢
昭和五年六月二十六日發行
昭和五年十一月二十二日訂正印刷
昭和五年十一月二十五日訂正發行



發行所

東京市神田區錦町一丁目
(振替東京四九九一番)

株式會社 明治書院

電話神田一四一四番

編者 垣内松三
發行者 株式會社 明治書院
取締役社長 鈴木友三郎
印刷者 東京市神田區雉子町三十四番地
綾部喜久二

